

第2部 シーニックバイウェイ制度導入に向けた試行の実施と課題

1. 北海道におけるシーニックバイウェイ制度導入モデル検討に向けた試行の実施

北海道において米国シーニックバイウェイ制度を参考とし、制度導入モデルの実証的な検討を行うため、検討の場として、モデルルートを設定し、種々の試行を実施した。

1.1 試行の基本方針

試行にあたっては、以下の試行内容を設定するとともに、試行実施の場として、2つのモデルルートを設定した。

1.1.1 試行の内容

試行は“制度推進の仕組みづくりに関する事項の試行”として既に設定している3つの制度推進のための基本方針に沿って行うこととした。また、基本方針には盛り込まれていない個別の地域活動団体の活動や、地域の創意による新たな視点での活動も実施されたことから、それらを“ルート運営活動内容に関する試行”として別途実施した。そして最後に活動団体に対するアンケート調査により、制度の試行全般に対する評価をとりまとめた。

(1) 制度推進の仕組みづくりに関する事項の試行

基本方針1 地域住民主体の運営体制づくりに関する試行

- ・地域住民の主体的参加による横断的推進体制の構築
- ・評価システムによる推進・支援体制の構築

基本方針2 ブランド形成によるコミュニティビジネスの創造に関する試行

- ・プロモーション推進によるブランド形成
- ・新たな地域ビジネス創造の積極的志向

基本方針3 持続的サポートのための仕組みづくりに関する試行

- ・シーニックバイウェイ制度に関する情報の共有化、情報発信等のネットワーク化
- ・リソースセンター（支援センター）設置等による持続的サポート体制の構築

(2) ルート運営活動内容に関する試行

- ・景観資源の保全・改善等に関する試行
- ・地域資源の保全・改善等に関する試行
- ・その他活動に関する試行
- ・活動の集中化による連携事業活性化に関する試行

(3) 制度試行全般に対する活動団体の評価

個々の試行の内容、成果、課題については、1.2 および 1.3 で詳述する。

1.1.2 モデルルートにおける試行

試行のためのモデルルート選定にあたっては、以下に示す3つの視点のもとに、検討した結果「千歳～ニセコルート」および「旭川～占冠ルート」とした。

なお、「ルート」の定義は、路線を指定するものではなく、これら地域を旅行する観光客が訪れると思われる範囲を含むものとした。(米国では「コリドー」と称される)

モデルルートの選定の視点

沿道景観・地域資源が多様である。

沿道景観・地域資源を保全・活用するために、積極的な地域の活動が期待できる。

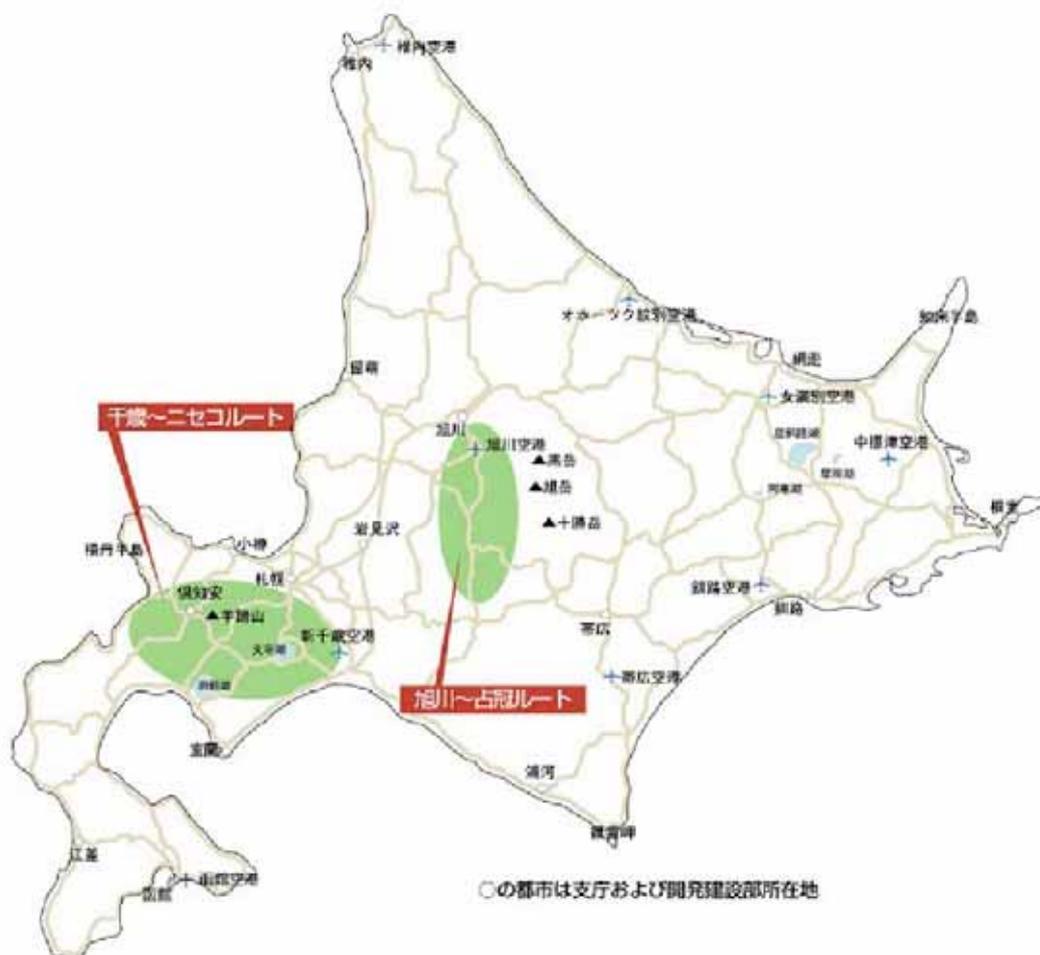
観光交通および旅行者入込が顕著に多く、検証に適している。

選定結果

千歳～ニセコルート（千歳市周辺からニセコ周辺に至る地域）

旭川～占冠ルート（旭川市周辺から占冠村周辺に至る地域）

図表 2.1 モデルルートの位置図



1.2 制度推進の仕組みづくりに関する事項の試行

1.2.1 地域住民主体の運営体制づくりに関する試行

(1) 地域住民の主体的参加による横断的推進体制の構築

ルート指定と参加団体の公募

- 内容 ・ 2モデルルートを指定し、制度がめざすビジョンとゴール、推進のための基本方針を示した上で、それぞれに参加団体を募集
- 成果 ・ 制度の趣旨に賛同した 38 団体が応募し、委員会が認定
- 課題 ・ 住民発意がなからずであり、本制度移行後においては地域住民自らがルートを提案することが必要

モデルルートにおける活動団体の参加

活動団体募集期間

- ・平成 15 年度認定分 平成 15 年 4 月 22 日～5 月 6 日
- ・平成 16 年度認定分 平成 16 年 1 月 22 日～4 月 10 日

活動団体の概要

		平成 15 年度認定団体	平成 16 年度追加認定団体
地域別	千歳地域	2 団体	1 団体
	洞爺地域	7 団体	0 団体
	二セコ地域	10 団体	1 団体
	旭川占冠地域	13 団体	4 団体
団体別	公益法人	5 団体	1 団体
	NPO 法人	6 団体	0 団体
	民間法人	2 団体	1 団体
	任意団体	18 団体	4 団体
	自治体	1 団体	0 団体
活動実績	有	29 団体	5 団体
	無	3 団体	1 団体
活動内容 (延べ数)	景観保全	30 団体	3 団体
	地域づくり	20 団体	4 団体
	観光振興	29 団体	2 団体
相談申込書応募		35 団体	10 団体
活動団体応募数		32 団体 (3 団体が申請を辞退)	6 団体 (4 団体が申請を辞退)

横断的推進体制づくりに向けた試行

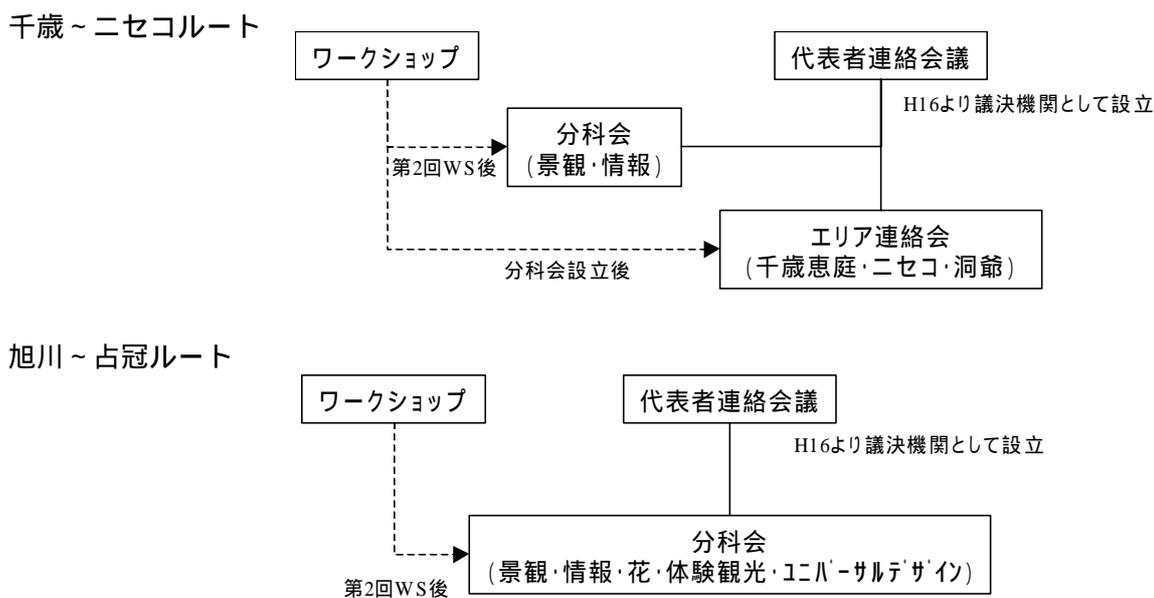
- 内容 ・ ワークショップ開催等連携のきっかけづくりと地域活動団体の連携に対する評価
- 成果 ・ ワークショップ開催をきっかけとした連携組織づくり（分科会、代表者会議の運営）
- ・ モデルルート以外の地域において、新たなルート形成に向けた地域活動団体等の主体的連携が出現（「東オホーツクシーニックバイウェイ連携会議」設立（平成 16 年 9 月 27 日）など）
- ・ 活動団体間の新たな交流促進および連携による新規活動の兆し
- 課題 ・ 持続的組織運営環境の整備（活動資金調達能力向上、活動時間・場所の確保等）
- ・ 関係市町村との一層の連携強化の必要性
- ・ ルート運営コンセプトの明確化と共有
- ・ ひとりひとりの意見を尊重する連携組織づくり
- ・ 自律的ルート運営のためのコーディネーター人材の育成
- ・ 地域の自主性を尊重できるような制度としていく必要性

現行モデルルートにおける連携組織の変遷

横断的な推進体制の確立に向けて、平成 15 年度は、ワークショップを開催し、活動団体相互の意見交換を促進。2 回のワークショップを経て、分科会を設置し、活動団体の横断的な活動を行ってきた。千歳～ニセコルートでは、活動範囲が広範におよぶことから、3 地域に分かれて各地域の活動を実施した。

平成 16 年度には、ルート運営活動計画策定等に向けて、各ルートの活動方針や活動内容を決定すべくワークショップを代表者連絡会議に改組し、ルート運営のための体制づくりをおこなってきたが、活動団体から団体間の連携調整を促進する人材の必要性が強く求められた。

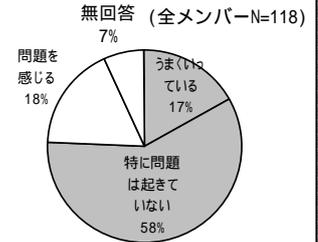
図表 2.2 モデルルートにおける連携組織の変遷



連携活動等に対する活動団体の評価

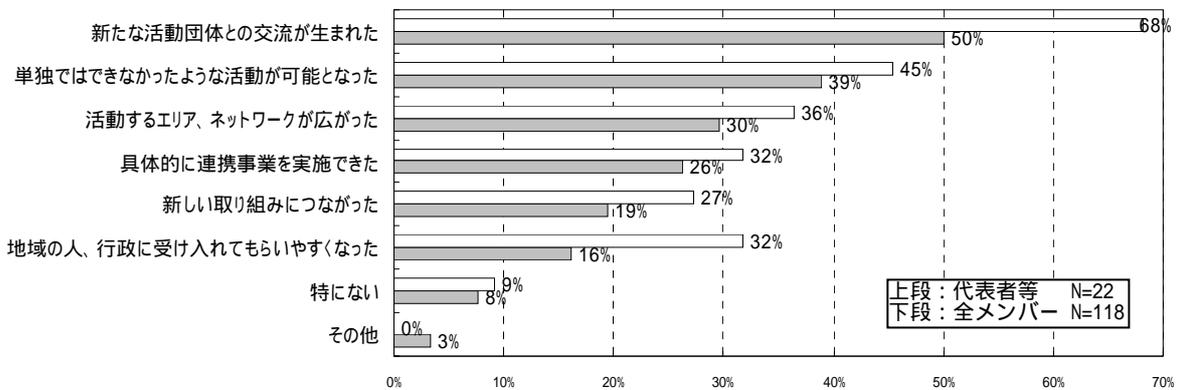
活動団体同士が連携する活動については、「特に問題は起きていない」、「うまくいっている」を合わせて約8割に及んでいる。

図表 2.3 活動団体同士の連携の現状



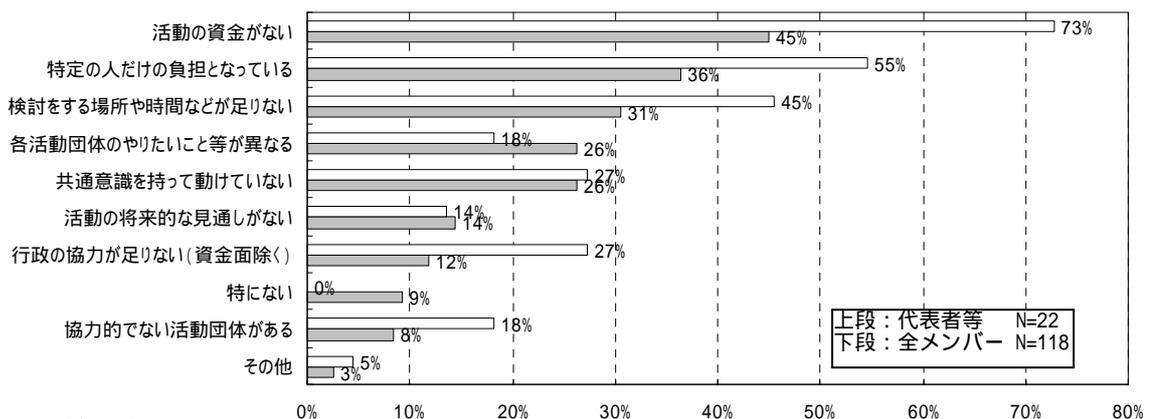
活動団体同士の連携により、50%の人が「新たな活動団体との交流が生まれた」39%の人が「単独ではできなかったような活動が可能となった」とし、30%の人が「活動するエリア、ネットワークが広がった」としている。

図表 2.4 活動団体同士の連携による効果 (活動団体アンケート：複数回答)



活動団体同士の連携での課題は、「活動の資金がない」が45%で最も多い。また、「各活動団体のやりたいこと等が異なる」、「共通意識を持って動けていない」がそれぞれ26%あり、ルート運営のための連携活動の難しさも見られる。

図表 2.5 ルート運営代表者会議の課題 (活動団体アンケート：複数回答)



【ヒアリング結果】

- ・無理に連携せず個別に活動しても良いが、やはり、全体のコンセプトが必要。
- ・代表者会議でも「声の大きい人」が主導になっている。主流ではないアイデアや考え方が埋もれていくことが多分にあるのではないかと。
- ・組織化された方がルートとしては動きやすい。ルートとして資金計画を持って収益性のある活動をしていくことが重要 など

千歳～ニセコルートでの主な活動

ワークショップの開催（活動申請団体が参加）

- 第1回 平成15年6月26日
 - ・各活動団体の活動内容の紹介
 - ・連携・共有化をテーマに意見交換
- 第2回 平成15年8月25日
 - ・コリドールの連携と運営について意見交換
 - ・テーマを具体的に実行するため、景観・情報の2つの分科会を設立
- 第3回 平成16年6月28日
 - ・平成15年度の活動報告や今後の取り組みについて情報交換

代表者会議の開催（千歳恵庭・ニセコ・洞爺の3地域ごとに開催）

- 千歳恵庭 平成16年7月26日 代表者を決定
- ニセコ 平成16年10月14日 代表者を決定
- 洞爺 平成16年8月6日 代表者を決定

分科会の開催

景観分科会

- 1)平成15年10月11日 社会に対する提言・提案型の活動を目標に、景観診断を実施
- 2)平成15年11月7日 今後の景観分科会の取り組みについてメニュー出し
- 3)平成16年1月10日 今後の事業計画に関する意見交換
- 4)平成16年3月17日 橋梁架け替えに伴う色彩・景観に関する意見交換
- 5)平成16年6月28日 ニセコエリアにおける地域資源調査（バス視察）

情報分科会

- 1)平成15年10月7日 情報発信に関する考え方1
- 2)平成15年11月12日 ホームページ、情報発信拠点など情報発信の方法について意見交換
- 3)平成15年11月21日 情報発信に関する考え方2
- 4)平成15年12月18日 今後の事業計画の決定（ホームページ、情報発信拠点）
- 5)平成16年1月6日 ホームページ、情報発信拠点に関する具体案を検討し、了承を得る

エリア連絡会

千歳恵庭

- 1)平成16年5月1日 9月～10月における各団体の取り組みと集中活動月間の告知
- 2)平成16年5月14日 団体独自の取り組みについて
- 3)平成16年5月27日 連携事業について
- 4)平成16年7月26日 9月～10月における各団体の取り組みを具体化

ニセコ

- 1)平成15年3月3日 ニセコエリアにおける景観・情報分科会の取り組みの報告・了承
- 2)平成16年5月19日 9月～10月における各団体の取り組みと集中活動月間の告知
- 3)平成16年5月29日 連携事業や新たな取り組みについて
- 4)平成16年8月31日 景観緑三法に関する勉強会

洞爺

- 1)平成15年11月17日 洞爺エリア全体の情報交換
- 2)平成15年12月9日 シーニックバイウェイに関する勉強会
- 3)平成16年2月10日 453キャンペーン（清掃活動）の広域連携化、情報発信に対する考え方
- 4)平成16年3月11日 連携事業として453キャンペーンの内容を検討
- 5)平成16年4月27日 連絡会でコリドー運営計画を検討

旭川～占冠ルートの子な活動内容

ワークショップの開催（活動申請団体が参加）

第1回 平成15年6月30日

- ・各活動団体の活動内容の紹介
- ・連携・共有化をテーマに意見交換

第2回 平成15年8月26日

- ・コリドールの連携と運営について意見交換
- ・テーマを具体的に実行するため、景観・情報・花・体験観光の4つの分科会を設立

第3回 平成16年6月23日

- ・平成15年度の活動報告や今後の取り組みについて情報交換

代表者会議の開催

平成16年8月3日

- ・ルート代表者の決定
- ・ルート運営計画の概要について意見交換

分科会の開催

景観分科会

- | | |
|---------------|---------------------------|
| 1)平成15年 9月20日 | 立ち寄りポイントの検討 |
| 2)平成15年 9月24日 | 景観診断について検討、西神楽の倉庫について意見交換 |
| 3)平成15年10月16日 | 「道路情報棟及びトイレの社会実験」について |
| 4)平成15年12月19日 | 景観分科会のフレームについて |
| 5)平成16年 2月27日 | 平成16年度に向けた活動内容の整理 |
| 6)平成16年 7月12日 | 平成16年度の活動について |

情報分科会

- | | |
|---------------|----------------------|
| 1)平成15年10月 3日 | 分科会の方針について |
| 2)平成15年11月14日 | ホームページでの情報発信について |
| 3)平成16年 8月12日 | ホームページのテストページについての検討 |

花分科会

- | | |
|---------------|-------------------|
| 1)平成15年 9月25日 | 花を沿道景観に取り入れるための検討 |
| 2)平成15年10月 6日 | 活動資金などについて |
| 3)平成15年10月21日 | 現地視察バスツアー |
| 4)平成15年12月19日 | 平成16年度の活動に向けて |
| 5)平成16年 2月24日 | 植栽の計画づくり |

体験観光分科会

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1)平成15年 9月30日 | 体験観光型バス（シーニックバス）の検討 |
| 2)平成15年11月21日 | モニタリングツアーの開催について |
| 3)平成15年12月18日 | シーニックバスの運行と今後のあり方について |

ユニバーサルデザイン分科会

- | | |
|---------------|------------------------|
| 1)平成15年10月16日 | ユニバーサルデザイン分科会の立ち上げについて |
|---------------|------------------------|

東オホーツクシーニックバイウェイ連携会議の始動

平成 16 年 9 月 27 日、美幌町、女満別町、網走市、東藻琴村、小清水町、清里町、斜里町の地域活動団体が「東オホーツクシーニックバイウェイ連携会議」(高谷弘志代表)を設立した。

この地域は、管内の空の玄関口である女満別空港を抱え、オホーツク海沿岸のオホーツク文化や流水、最東端には世界自然遺産への登録を進めている知床国立公園を有する、北海道内でも有数の景観、自然、文化を有する地域である。

この地域では、大小様々な地域活動を行う民間団体が多くあったものの、この広い地域で連携した活動を行う機運は生まれてこなかった。しかし、シーニックバイウェイ北海道の動きをいち早く捉え、地域行政と連携しながら、「東オホーツクシーニックバイウェイ連携会議」を設立したところである。現在、活動団体を幅広く募集しながら、地域での説明会を実施しているところであり、最終的な団体数は未定であるが、各市町村の観光協会、商工会議所・商工会が事務的作業を担い、活動団体を募っているところである。

このように、地域が独自に連携組織を立ち上げる例も出てきたことから、地域の自主性を尊重するような制度としていくことが必要である。



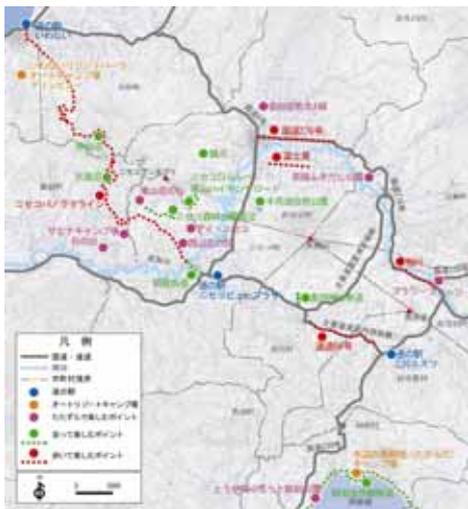
東オホーツクシーニックバイウェイ連携会議

ルート運営活動計画策定に向けた試行

- 内容 ・ 計画策定に向けた準備および策定作業
- 成果 ・ 計画策定のために必要な景観資源診断、地域資源診断の実施
 ・ 計画策定主体となるルート運営代表者会議の設立
 ・ ルート運営活動計画の策定作業の実施
- 課題 ・ 活動団体間の連携推進のための連絡・調整への支援
 ・ 計画策定時、必要に応じて技術的支援が必要

ルート運営活動計画に向けた各ルートの活動事例

千歳～ニセコルート (千歳恵庭・ニセコ・洞爺エリア合同連絡会)		
	H17年3月上旬	千歳～ニセコルート方針検討
(千歳恵庭エリア)	H16年11月18日	ルート運営活動計画骨子素案
	H16年12月16日	ルート運営活動計画およびH17活動計画検討
	H17年1月14日	ルート運営活動計画決定予定
(ニセコエリア)	H16年10月14日	ルート運営活動計画骨子素案
	H16年12月17日	ルート運営活動計画およびH17活動計画検討
	H17年1月下旬	ルート運営活動計画決定予定
(洞爺エリア)	H16年10月18日	ルート運営活動計画骨子素案
	H17年1月下旬	ルート運営活動計画決定予定
旭川～占冠ルート (代表者連絡会議)		
	H16年12月中旬	ルート運営活動計画骨子素案
	H17年2月	ルート運営活動計画決定予定
(各分科会・計画部会)	H16年10～12月	分科会活動の方向性検討
	H17年2月上旬	ルート運営活動計画の検討予定



(2) 評価システムによる推進・支援体制の構築

地域資源診断による活動支援に対する試行

内容 ・地域資源の潜在的魅力の発掘と提示による地域活動の活発化やルート選定・認定時の判断材料とするため、以下の診断を実施

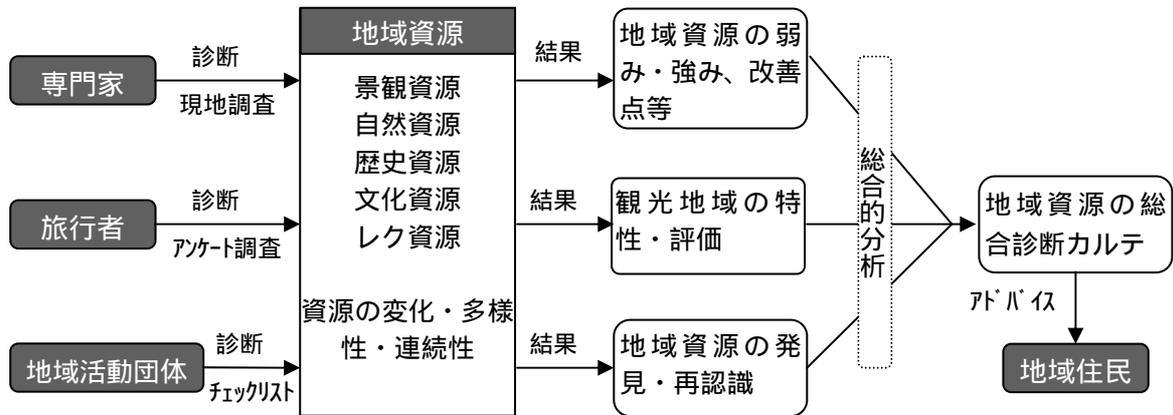
- ・ 専門家診断 - 外部有識者による地域資源の評価による当該地域の地域資源の弱み・強み、改善点の抽出
- ・ 旅行者診断 - 全国旅行者アンケート調査による、ルート内主要観光エリアの位置づけ・観光特性の把握
- ・ 地域住民診断 - チェックシート方式自己診断アンケートによる潜在観光資源の抽出
- ・ 委員会での検討過程で、地域資源の質的向上が目的との観点から、地域団体活動に資することを重視した診断とすることとした

成果 ・活動団体アンケートからみた診断結果全般では、「自分たちがあまり知らない資源があった(18%)」、「観光客などが好む資源が分かった(14%)」など、ある程度活動の参考になった。

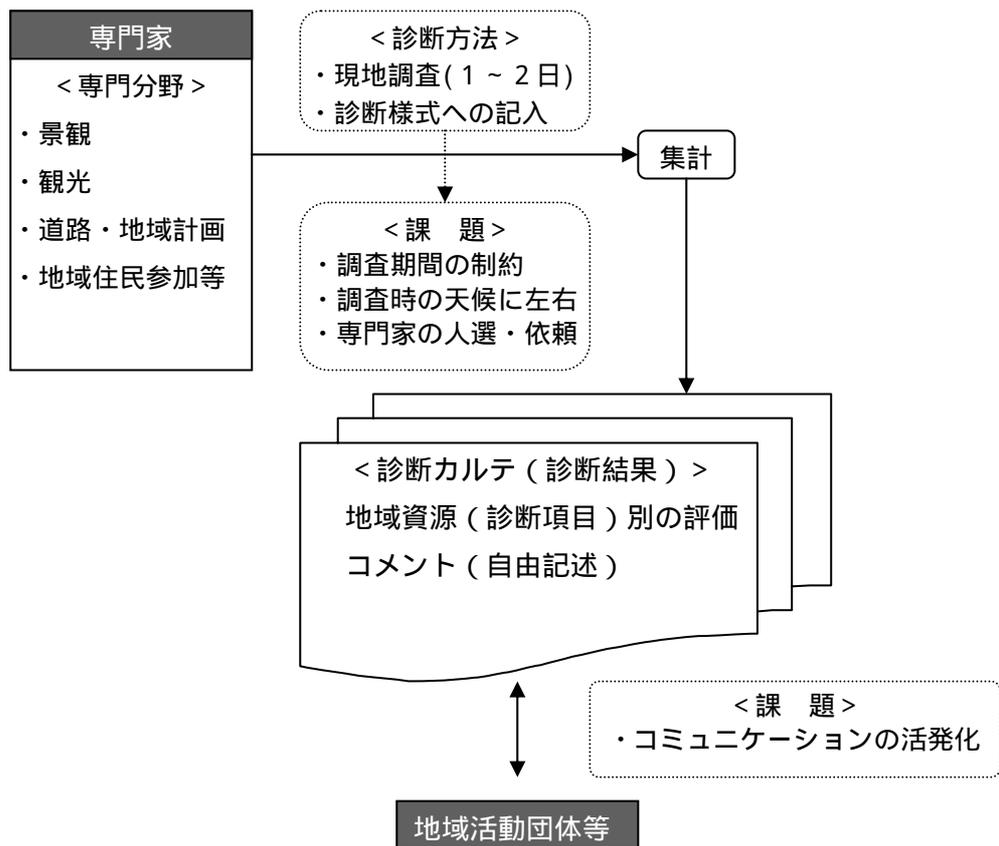
課題 ・専門家診断はルート運営活動計画における客観的な地域資源診断方法として、また地域資源の保全・活用活動を通じた改善成果の確認手法としての活用が期待されるが、実施にあたって、雨天等の気象条件による景観診断への影響や十分な地域資源把握のための調査時間の確保など、今後の改善方策の提案なども含め効果的な診断調査実施手法の改善が必要

- ・ 旅行者診断は、旅行者ニーズ把握のために必要であるが、よりキメの細かい診断や変化する旅行者ニーズに対応した的確な診断としていくなどの改善が必要
- ・ 地域住民診断は、地域住民による地域資源の再認識・発掘に有効な手法であるが、今回の試行では回答者の負担が多めで、有効数を集めることができなかった。そのため持続的な自己点検が可能となるような地域活動団体自らが手軽にできる自己診断手法の開発が求められる。
- ・ 地域活動団体アンケートにおける地域資源診断全体の評価を見ると、ある程度の評価は得られたものの、「これまでとそれほど変わらなかった(50%)」が最も多く、活動に役立つ地域資源診断の内容および方法などの改善が必要である。
- ・ また分析結果の分かりやすさについても「分かりやすい(18%)」となっており、55%が「簡便なら使いやすい」と答えており、分析結果の平易な提示方法について検討が必要である。
- ・ 地域活動団体に対する活動支援のための診断といった観点から、診断結果を踏まえた地域住民相互、地域住民と行政間のコミュニケーションの活発化など、診断結果の有効活用が必要である。

図表 2.6 地域資源診断全体のしくみ



図表 2.7 専門家診断の流れと診断結果の例



図表 2.8 専門家診断・診断カルテの例

< 地域資源毎の評価結果 >

(総評) 自然資源の季節感、雄大感、レクリエーション施設の立地、資源の集積と多様性に優れている。歴史、文化が弱い項目。歴史、文化資源については、評価が分かれている。

総合評価		
[1]沿道景観評価	A	◆ ○ ◆ E
[2]自然現象・気象・自然資源	A	◆ ○ ◆ E
[3]歴史資源	A	◆ ○ ◆ E
[4]文化的・民俗的資源	A	◆ ○ ◆ E
[5]レクリエーション資源	A	◆ ○ ◆ E
[6]資源の変化・多様性・連続性	A	◆ ○ ◆ E
総合評価点	A	◆ ○ ◆ E

評価軸(6つの分類軸)	チェック項目	評価
[1]沿道景観評価	ランドマーク等の見え方	ランドマークが印象的な箇所が多い ◆ ○ ◆ 少ない
	シーン景観(絵になる風景)の存在	写真を撮りたい箇所が多い ◆ ○ ◆ 少ない
	シークエンス景観(走行景観)のおもしろさ	走行が楽しい ◆ ○ ◆ つまらない
	開放感・囲まれ感	エリアの印象として開放感が印象的 ◆ ○ ◆ 囲まれ感が印象的
	風景の劇的変換	風景が一変するところが多い ◆ ○ ◆ 少ない
	手入れ感	手入れが行き届いている印象がある ◆ ○ ◆ ない
[2]自然現象・気象・自然資源	四季の資源変化・移ろい	季節感がある ◆ ○ ◆ 季節感が無い(単調)
	神秘的な雰囲気	神秘的・聖的な印象が強い ◆ ○ ◆ 弱い
	雄大な雰囲気	雄大な印象が強い ◆ ○ ◆ 弱い
[3]歴史資源	歴史的な雰囲気	歴史的な雰囲気をかなり感じる ◆ ○ ◆ まったく感じない
	歴史的人物	歴史的人物資源が豊かである ◆ ○ ◆ 乏しい
[4]文化的・民俗的資源	祭り・イベント	参加したい際・イベントがある ◆ ○ ◆ ない
	郷土料理・食	ここで今しか食べられないものが豊富 ◆ ○ ◆ どこでもいつでも食べられる
	土産・特産品	買って帰りたいものが沢山ある ◆ ○ ◆ ない
	工芸・芸術	工芸・芸術品が豊富である ◆ ○ ◆ まったくない
	人のサービス	サービスが良い印象 ◆ ○ ◆ サービスが悪い印象
	人との出会い・交流	印象的な人との出会いがある ◆ ○ ◆ ない
	雰囲気が洗練・素朴	洗練した雰囲気 ◆ ○ ◆ 素朴な雰囲気
[5]レクリエーション資源	集客の核となる施設の存在	全国的な誘致力のある施設がある ◆ ○ ◆ まったく平凡
	魅力的な体験メニューの存在	魅力的な体験メニューが豊富 ◆ ○ ◆ 乏しい
	印象的な演出の存在	個性的な演出が感じられる ◆ ○ ◆ 感じられない
[6]資源の変化・多様性・連続性	資源の集積度・密度	観光資源が集積していると感じる ◆ ○ ◆ 乏しく退屈感がある
	資源の多様性	観光資源が多様多様と感じる ◆ ○ ◆ 単調単一と感じる
	意外性(期待と実感とのギャップ)	予想したイメージよりかなり良好 ◆ ○ ◆ イメージに負けている

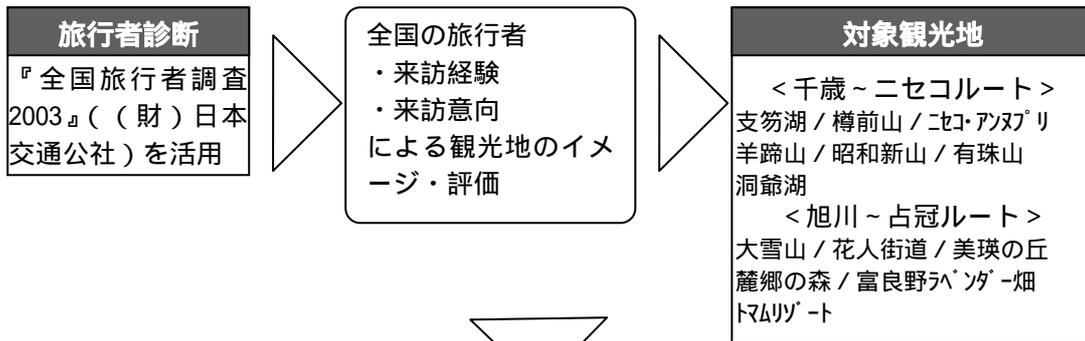
< 専門家からのコメント例(自由記述) >

(総評) 自然資源のポテンシャルが特に高い / 資源の多様性に恵まれている

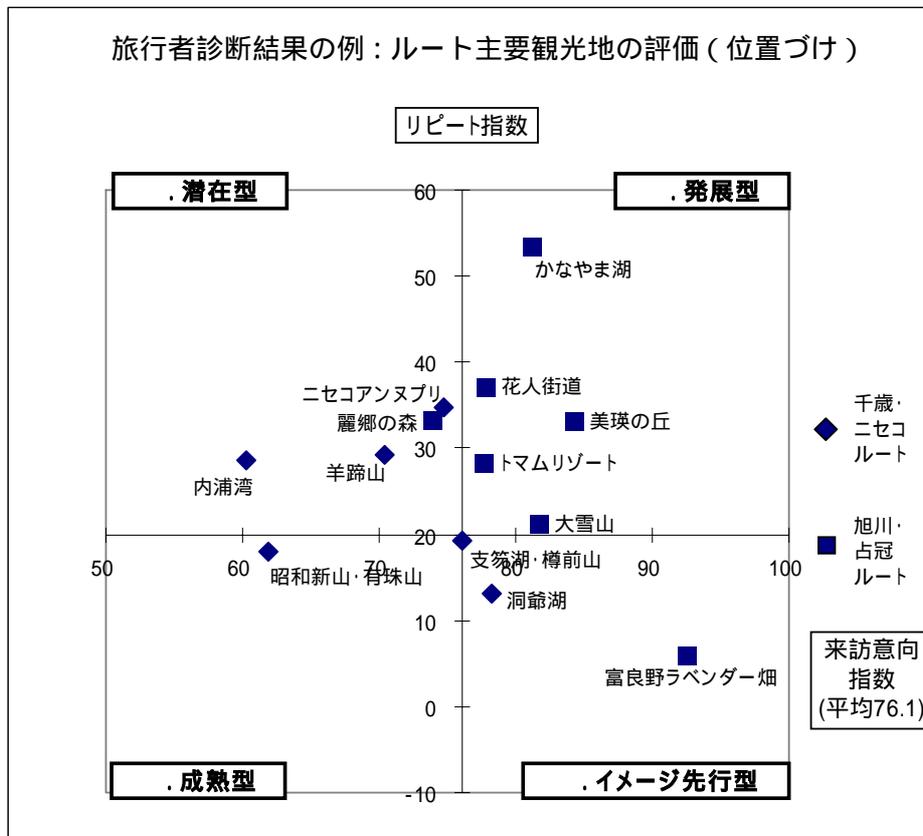
自然資源のポテンシャルが高く、その集積と多様性が魅力。文化資源を、農村文化、都市文化、リゾート文化ととらえることで、新しい文化的な魅力が発揮できる。まさに活動団体による主要課題となるだろう。

/ 建築物のデザインや緑のデザインに課題が多く残されている。 / 沿道の広告看板の多さに比べ、道路誘導サインや道路情報サインが不足。 / 地域景観の中の一要素としての道路の存在を考えること。 / 美しい川が地域の良いイメージを伝える資源としてあまり生かされていない。 / イメージ通りの部分が多く、意外性に欠ける。 / 強い印象を持って通過してしまうところが多い。立ち寄れるポイントの整備が必要。

図表 2.9 旅行者診断の流れと診断結果の例

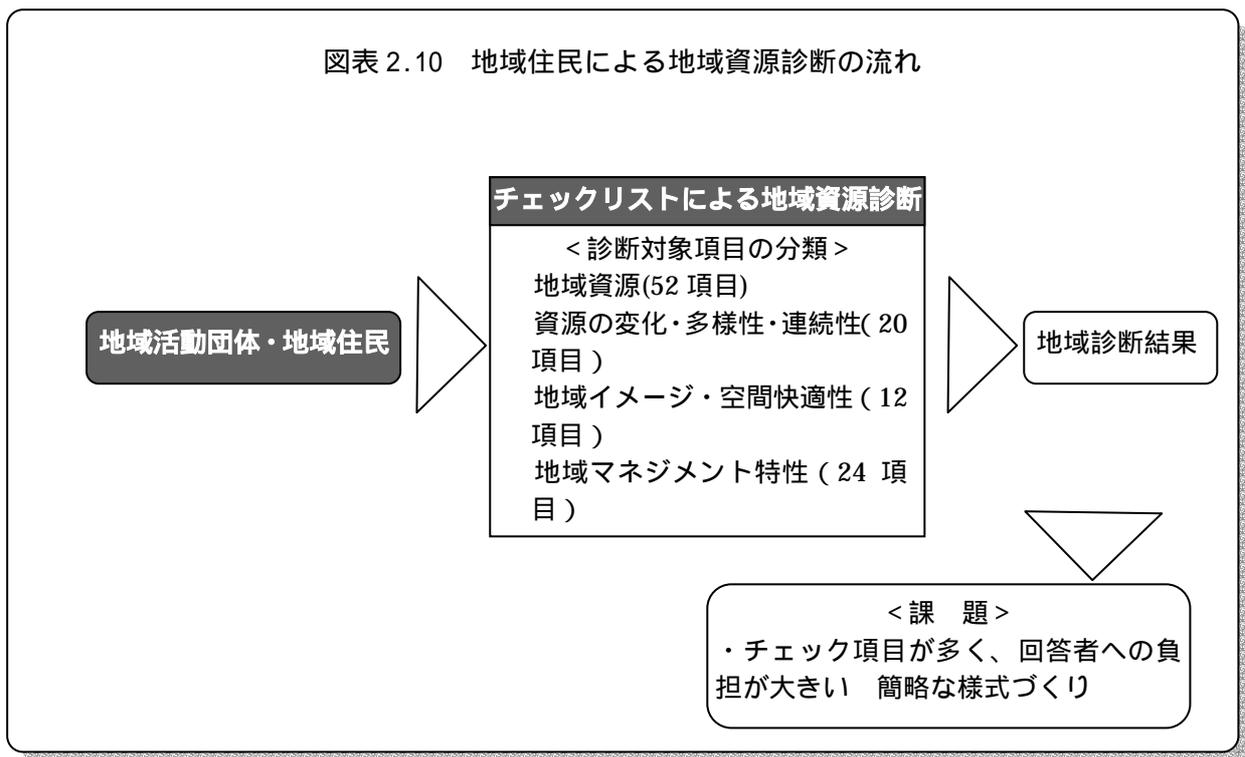


旅行者診断結果の例：ルート主要観光地の評価（位置づけ）



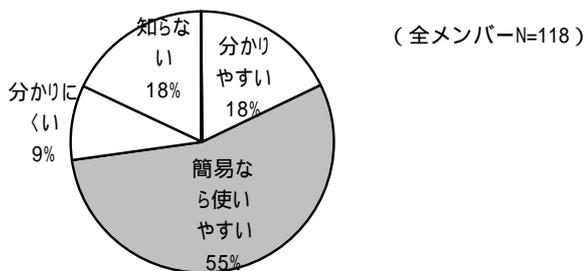
- 発展型** ・来訪者指数、リピート指数とも高い評価・来訪経験者からの評価が未経験者による評価を上回る。旅行者の志向に沿った優良な観光地・旅行市場の動向をたえずウォッチしながら、いっそう魅力の高い観光地づくりを進めていくことが必要
- 潜在型** ・リピート指数は高いが、来訪者指数は低調。来訪経験者からの評価は高いにも関わらず、総合的な評価は伸び悩んでいる観光地。今後、来訪者数を増加させていくためには、プロモーションの強化によって観光地としての知名度を高めていくことが必要
- 成熟型** ・リピート指数、来訪者指数共低調。ブームが沈静した観光地。リピーターおよびリターナーを増加させるための新たな魅力づくりが必要
- イメージ先行型** ・リピート指数は低調であるが、来訪者指数の評価は高い。来訪経験者からの評価が未経験者の評価と比べて低く、実際の魅力以上に好イメージがもたれている観光地。このままでは、徐々に来訪意向が低下し、来訪者数が減少していくことも想定されるので、あらためて魅力づくりに関する検討を始めることが必要

図表 2.10 地域住民による地域資源診断の流れ

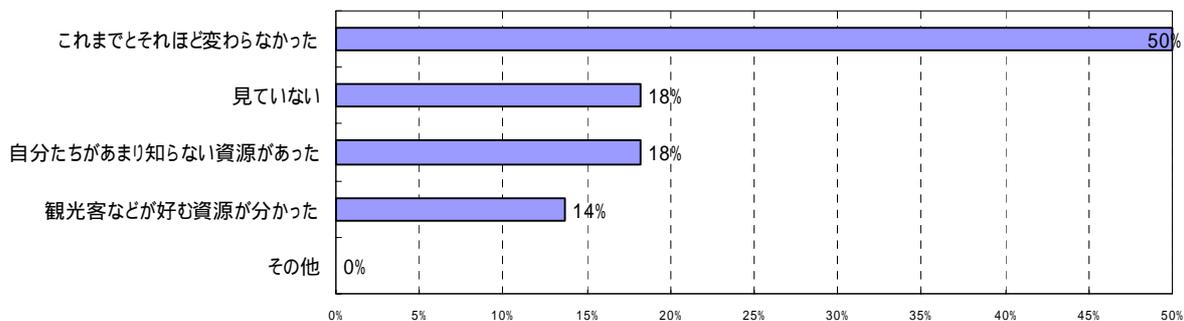


活動団体アンケートからみた地域資源診断の評価

図表 2.11 診断結果の分かりやすさ (活動団体アンケート)



図表 2.12 診断結果の内容に対する評価 (活動団体アンケート) (代表者等 N=22)



活動団体診断による活動支援

- 内容 ・地域活動事例集・ルート運営に関する活動マニュアル（案）の作成
 ・活動団体自己診断手法の開発
- 成果 ・地域活動事例の収集と提供
 ・試行期間中等における個別団体活動、連携活動に関するアンケート調査の実施
- 課題 ・活動団体診断は不断の活動の検証・改善の繰り返しが重要であり、持続的な自己点検診断が基本となる。そのため活動団体の自己点検・診断実施への意識向上とともに簡便で活動活性化への効果が図れるような自己点検・診断手法を提供することが必要

活動団体支援のための自己診断プログラムの開発

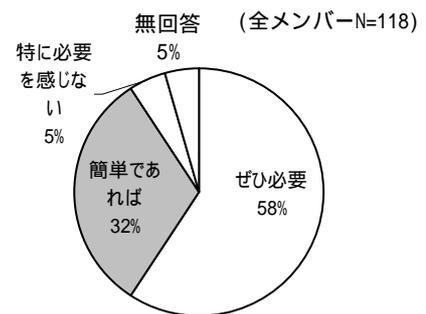
自己診断の目的

活動団体による活動結果を自己診断することによって、自ら活動の改善点、成功のポイントを発見する。また、シーニックバイウェイ北海道に関わる活動団体およびその他の団体に情報公開を行い、成果を共有する。

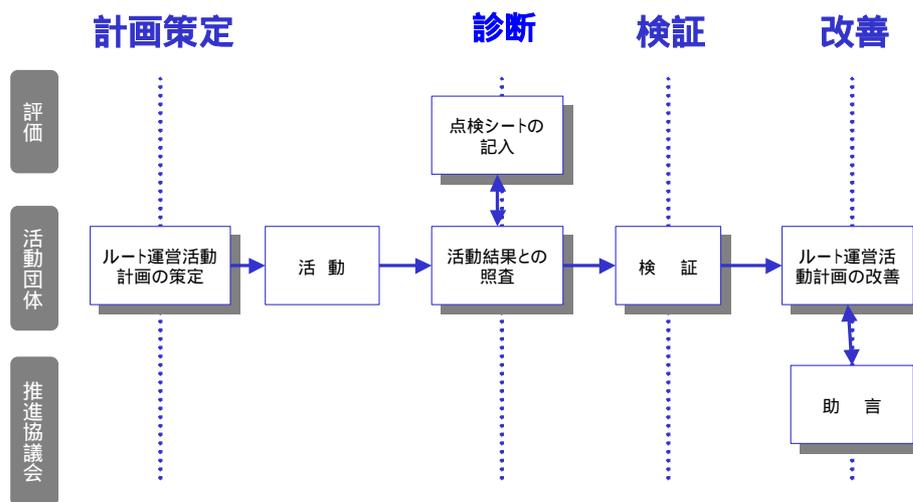
自己診断の基本的考え方

- 1)楽しんで活動すること
- 2)十分に活動の準備をすること
- 3)顧客志向で活動すること
- 4)情報公開を行い、オープンな活動環境とすること
- 5)必要に応じて他の活動団体と連携すること
- 6)将来的にコミュニティビジネスにつながることを

図表 2.13 活動団体診断の必要性
 (活動団体アンケート)



図表 2.14 自己診断プログラムのフロー図



1.2.2 ブランド形成によるコミュニティビジネスの創造に関する試行

(1) プロモーション推進によるブランド形成

情報提供手段の多様化

- 内容
 - ・複数のホームページ（国土交通省北海道局、リソースセンター（支援センター）、モデルルート）による多様な情報提供
 - ・専門雑誌等への投稿
 - ・旅行雑誌、新聞等との連携企画記事掲載
 - ・各種フォーラムにおける広報
- 成果
 - ・各種マスコミ報道による情報提供の多様化と広域化
 - ・認知度向上による観光関連産業における関心度の向上
 - ・ルート別ホームページ構築による、ルート別広報能力の向上
- 課題
 - ・各推進主体毎の積極的広報活動の推進

多様な媒体への積極的な情報提供の実施

専門雑誌等への投稿

『開発こうほう』（財団法人北海道開発協会）や『交通工学』（社団法人交通工学研究会）『観光会議ほっかいどう』（札幌国際大学・リクルート北海道じゃらん）など専門誌への記事投稿により関心の高い層への情報提供を行った。（参考資料2を参照）

各種フォーラムにおける講演等

北海道各地の地域団体や景観整備に携わる団体などからの要請に積極的に対応して、シーニックバイウェイ北海道に関する講演を行った。（参考資料2を参照）

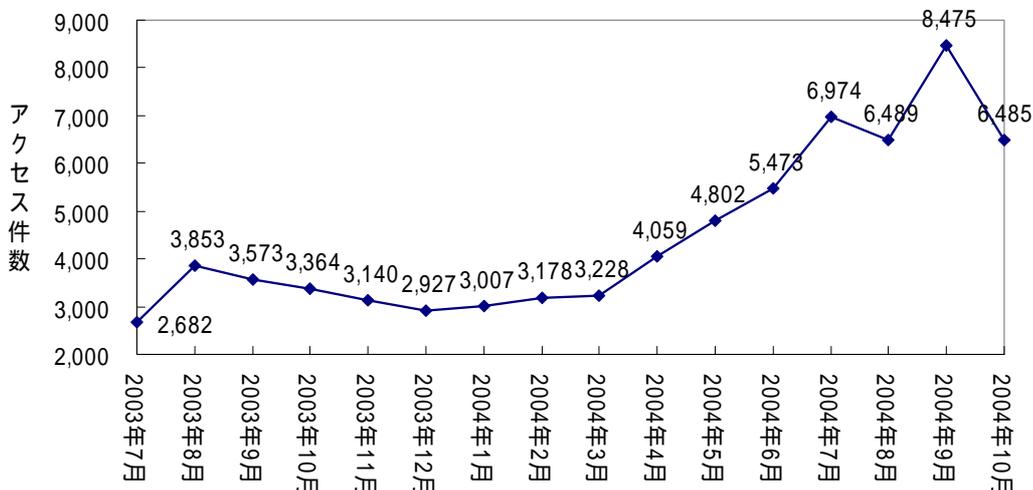
ホームページによるルートの情報提供

ホームページを公開し、各ルートの地域資源に関する企画記事の掲載、シーニックバイウェイ制度の解説の情報提供を総合的に行った。ピーク時には8000件/月までアクセス件数が増加した。



ホームページによる情報提供

図表 2.15 ホームページ公開からの月別アクセス件数



集中活動による来訪促進活動

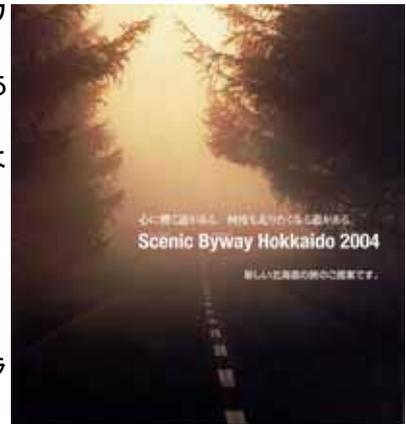
- 内容** ・集中活動月間（9月）を設定、活動団体等との連携による各種活動の集中的実施を提案し公表
- 成果** ・活動の顕在化によるマスコミ報道の増加と来訪者増加（テレビ放映直後のホームページアクセスが倍増）
- 課題** ・活動現場における告知、情報提供手法の連携
 ・事業相互の連携の強化、マスコミ等への告知に必要な十分な準備期間の確保

地域との協働による集中活動月間の実施

平成 16 年 9 月 4 日～10 月 4 日の 1 ヶ月間をシーニックバイウェイ集中活動月間として位置づけ、活動団体及び行政が連携し、地域全体として広域的かつ集中的に、美しい景観づくり、活力ある地域づくり、魅力ある観光空間づくりに取り組んだ。

以下のような各種活動を各地域で集中的に実施することにより、対外的魅力度が向上し、旅行者の来訪促進に寄与した。

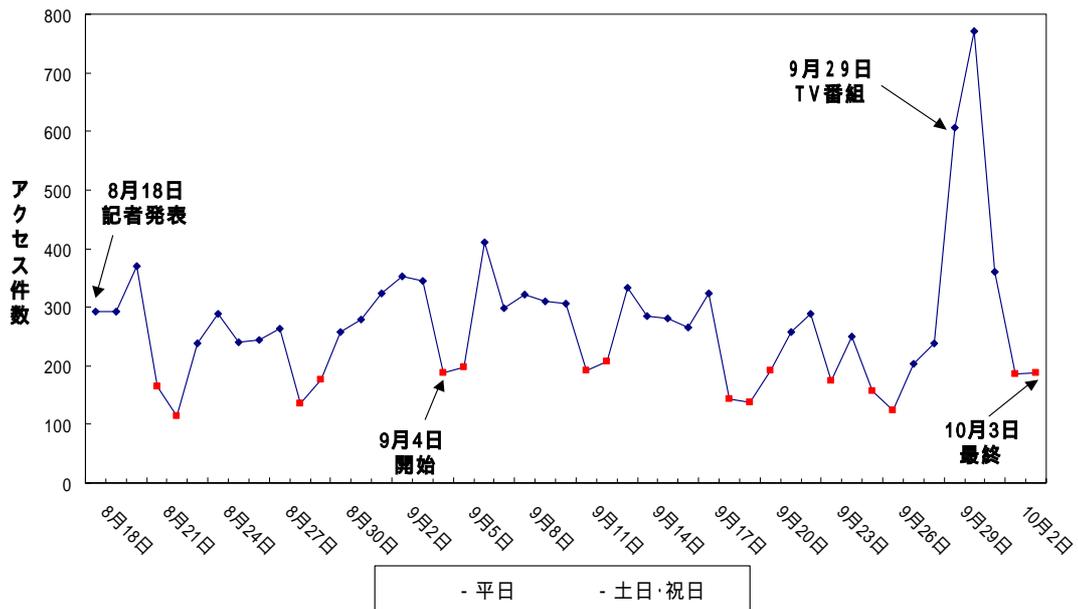
- ・地元だから解る、この季節の景観ポイント紹介
- ・景観ポイントや催事が解る情報拠点の開設
- ・活動団体等による共催ツアー・行事の実施
- ・景観・シーニックバイウェイツーリズムについて考えるフォーラム等の開催
- ・景観保全等に係わる一斉活動(景観診断、一斉清掃等)



PR 用パンフレット

平成 16 年 8 月 18 日に北海道開発局が行った記者発表から集中活動月間最終日までのアクセス件数は、12,574 件で、平成 16 年 9 月 29 日の TV 番組で取り上げられてからは、1 日 700 件以上のアクセスとなった。

図表 2.16 集中活動月間から終了までのHPアクセス数の推移



シーニックバイウェイ制度の普及

- 内容 ・記者発表などを通じて広報活動の推進を行い「シーニックバイウェイ」の名称を普及
 ・フォーラムや講演会への招聘により「シーニックバイウェイ」の活動を普及
- 成果 ・「シーニックバイウェイ」の認知度が約1年間で30%程度まで向上
- 課題 ・名称の普及だけではなく、理念や活動の認知および理解が必要

シーニックバイウェイ制度の普及

講演会・フォーラムの開催

「シーニックバイウェイ 2003 クランクインフォーラム」、「シーニックバイウェイ 2004 2nd ステージフォーラム」などの開催により、「シーニックバイウェイ制度」普及や理解の促進を図った。

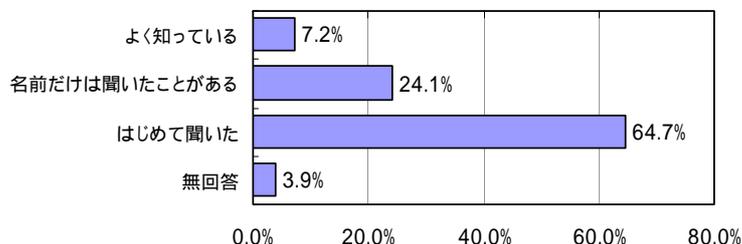
シーニックバイウェイの各種媒体への掲載

シーニックバイウェイの名称は観光雑誌や新聞でも取りあげられるなど、「シーニックバイウェイ」の呼称自体が各種媒体でとりあげられるようになった。

シーニックバイウェイの認知度

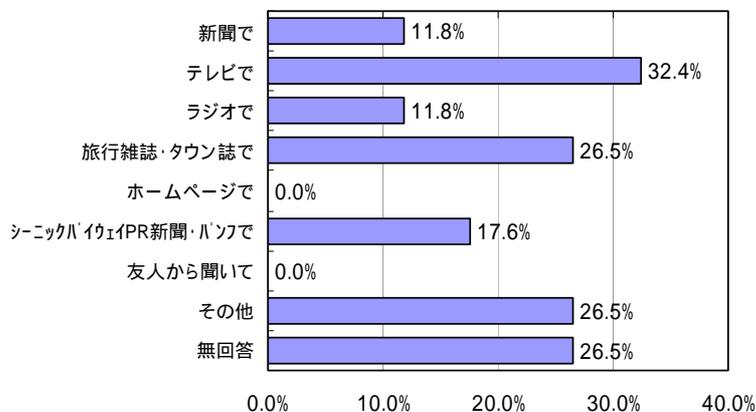
シーニックバイウェイの認知度は、旅行者に対して実施したアンケート調査（北海道開発局）によれば、約30%となっている。

図表 2.17 シーニックバイウェイの認知度(N = 456)
 / 集中活動月間アンケート(北海道開発局資料)



図表 2.18 集中活動を最初に知ったきっかけ(N=34)

集中活動を「知っていた」人のみ回答



(2) 新たな地域ビジネス創造の積極的志向

地域の創意を活かしたビジネス創造

- 内容 ・冬のシーニックバスツアー、羊蹄山周遊バスツアー等の実施
- 成果 ・地域資源活用型の新たな観光ビジネスの可能性が確認
・活動団体間の連携による旅行者の多様なニーズに対応
- 課題 ・連携によるイベント等の相乗効果向上のためコーディネーター人材の育成が必要

冬季交通環境の検証及び景観資源の発掘を目的としたバスツアーの実施

旭川～占冠ルート体験観光分科会では、冬期に観光客が激減する理由の一つは雪道への不安であるとして、地元に通じた熟練ドライバーのバス運行によるツアーを企画した。この企画は冬の「景観の美しさ」、「楽しみ方」を網羅するという内容で「1.景色が良い道路」、「2.アクティビティ」、「3.地元ガイド」、「4.食」といった4つの柱でツアーを構成した。

年間700万人といわれる観光客も、7割強は夏の旅行客である。冬に仕事が無い事や景気の冷え込みで、この地域も、経済状況は非常に厳しく、打開策として、「冬の活性化」は地域の最大のテーマであるが、大勢の観光客を冬に呼び込むのは、現実的には難しい。

平成15年12月、体験観光分科会は、参加3団体によってモニターツアーを行った。

当日の気象条件により、道路を選んで走り、スノーシューで遊び、ガイドは数人で交代しながら、景色やその土地の成り立ちなどを説明した。昼食は農家に立ち寄り、スローフード弁当を食す。約5時間のモニターツアーを行い、一般の方々へのサービス提供を検討した。

一般向けには、平成16年1月～3月に、スノーシュー体験を中心にモニターツアーを試験的に開催した。ツアー期間中に約50人の参加があり、以下のような意見が聞かれた。

- ・景観についての解説が良い。
- ・冬の地域マップが欲しい。
- ・このエリアの風景や現在の位置がわかるような工夫が欲しい。
- ・マイカーではとても行かないようなところだったので良い体験になった。
- ・スノーシュー体験+温泉などもっとゆっくり過ごせるような内容だともっと良い。

関係者と一般の方のモニター結果を持ち寄り、本格運営に向けて、実施の体制づくりや、旅行会社のツアーとの差別化などを検討している。



冬季シーニックバスツアー実施の様相

地域資源を活用した地域ビジネスの担い手育成

- 内容 ・ 旅行会社との連携による起業家育成プログラムの実施など
- 成果 ・ 民間企業等におけるシーニックバイウェイとの連携ビジネス意識の高まり
- 課題 ・ 民間企業等と活動団体間のコーディネート機能の構築が必要
- ・ 民間企業等の事業ニーズの把握

民間企業と連携した起業家育成プログラム「ベンチャーキッズ in らんこし」の実施

活動団体と民間企業の協働事業であるベンチャーキッズプログラムでは、平成16年9月18日、25日～26日の3日間、小学生や中学生向けの企業経営の学習プログラムにそって、地域の子供たちが地域の特産品を活かした商品開発から販売までを実際に行うもので、起業家育成を目的として実施された。

実施の概要

主催：ベンチャーキッズ in らんこし実行委員会

後援：蘭越町、蘭越町教育委員会、蘭越町商工会、WAO

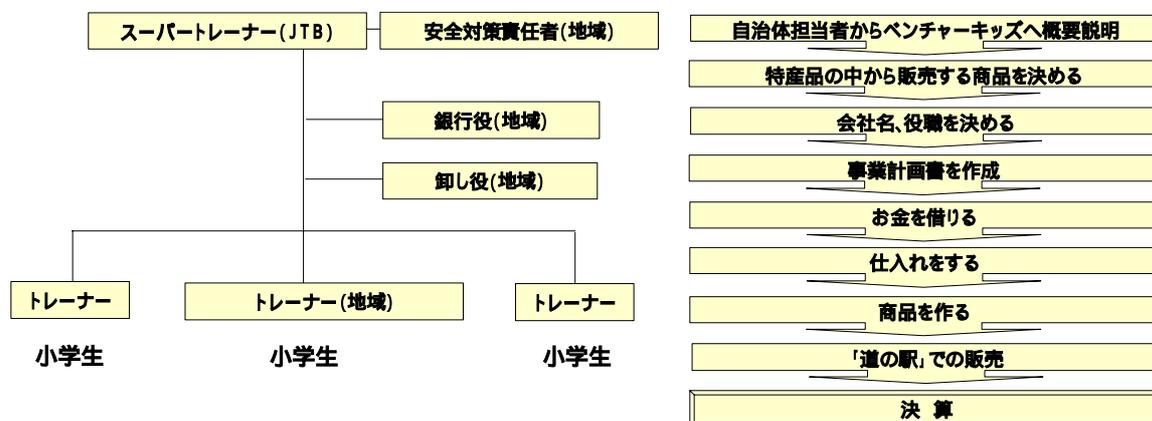
協力：小樽開発建設部

プログラム企画：株式会社ジェイ・ティー・ビー

プログラム運営：株式会社セルフウイング

参加者：蘭越小学校、御成小学校、三和小学校、福住小学校、蘭越中学校（計28名）

図表 2.19 ベンチャーキッズのプログラムの一例



事業計画の発表



開発商品の販売

1.2.3 持続的サポートのための仕組みづくりに関する試行

(1) シーニックバイウェイに関する情報の共有化、情報発信等のネットワーク化
インターネットを活用した情報共有システムの構築

- 内容 ・リソースセンター（支援センター）によるホームページの公開
 成果 ・ホームページへの写真投稿システム（シーニックフォト倶楽部）による景観画像データや景観づくりに関する各種データの蓄積
 ・メーリングリストによる情報提供や情報交換の活発化
 課題 ・情報活用能力の向上や多様な情報提供手法の活用

ホームページやメーリングリストによる情報の共有化

シーニックバイウェイ制度導入モデルの試行に関わる活動団体、行政機関、広報媒体となるメディアとの情報の共有化を進めるため、ホームページやメーリングリストの整備を行った。ホームページは、平成 15 年 7 月の開設時のアクセス数が 2,800 件弱であったが、シーニックバイウェイ制度導入モデルの試行を通じた関心の高まりから、月 7,000 件弱(集中活動月間は除く)までアクセス数をのばしている。また、メーリングリストの参加者数も、平成 16 年 11 月時点で活動団体、行政機関関係者の計 229 名に配信されるシステムとなっている。



地域活動を紹介したホームページの画面

(2) リソースセンター（支援センター）設置等による持続的サポート体制の構築
リソースセンター（支援センター）機能に関する試行

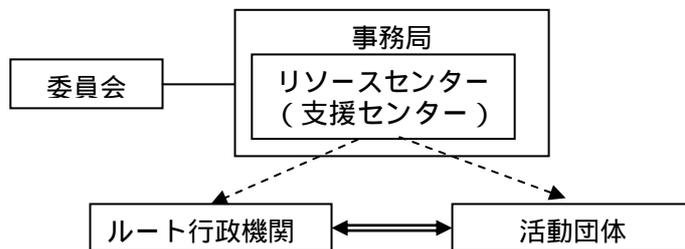
- 内容 ・ 検討委員会事務局内にリソースセンター（支援センター）を設置し、運営
 成果 ・ リソースセンター（支援センター）参画による活動団体間の調整機能の向上
 ・ 活動団体と関係行政機関間の連絡調整機能の向上
 ・ 活動団体からの問い合わせ窓口一本化による情報提供や相談の円滑な実施
 ・ 関係情報等の蓄積
 課題 ・ 活動団体への技術的支援、連携支援等での作業負荷が予想以上に多大
 ・ 制度推進体制全般におけるリソースセンター（支援センター）機能の明確化
 ・ ルート運営におけるリソースセンター(支援センター)と活動団体の適正な役割分担のあり方の検討

シーニックバイウェイ北海道リソースセンター（支援センター）による持続的支援の試行

リソースセンター（支援センター）の位置づけ

委員会事務局にリソースセンター（支援センター）を置き、活動団体の持続的支援体制を確立することとした。リソースセンター(支援センター)では千歳～ニセコルートには各エリアに1名、旭川～占冠ルートには1名の担当者を置いた。

図表 2.20 試行におけるリソースセンター（支援センター）の位置づけ



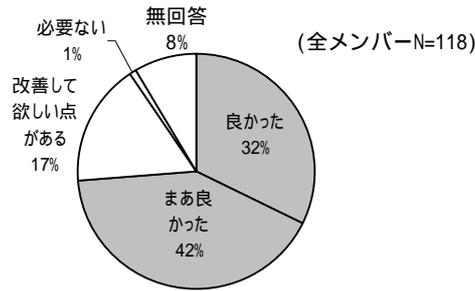
リソースセンター（支援センター）の主な機能

- (1) 活動団体の活動内容への助言
- (2) ワークショップの開催などルート運営に関わる企画および調整
- (3) シーニックバイウェイ制度およびモデルルート全体のプロモーション
- (4) 景観資源や地域資源の保全・活用に関わる資料収集および情報発信
- (5) 米国シーニックバイウェイリソースセンターとの交流事業

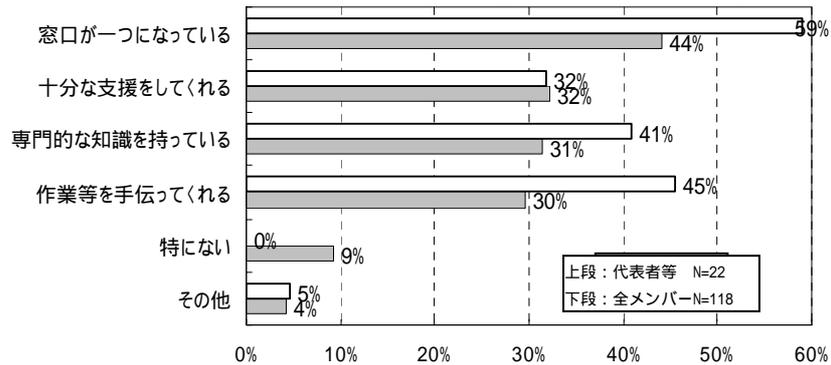
リソースセンター（支援センター）に対する活動団体の評価（活動団体アンケートから）

- ・ 「良かった（32%）」、「まあ良かった(42%)」と、3/4 が評価している。
- ・ リソースセンターの最も良かった点は「窓口が一つになっている(44%)」ことで、特に代表者において高率(59%)となっている。
- ・ リソースセンターに期待する役割は「行政との調整(62%)」が最も高く、「助成金情報の提供(47%)」、「活動団体間の調整(45%)」が続いている。
- ・ 地域で代行できるリソースセンターの役割として「活動団体間の調整、情報交換(47%)」、「行政との調整、情報交換(30%)」と続いている。

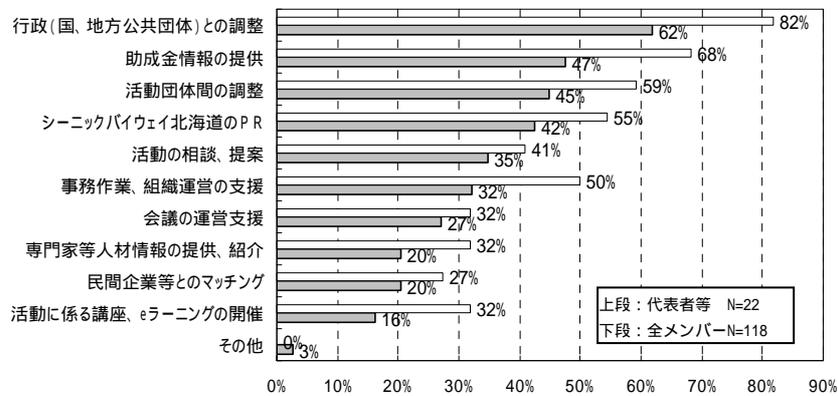
図表 2.21 リソースセンター（支援センター）に対する満足度（活動団体アンケート）



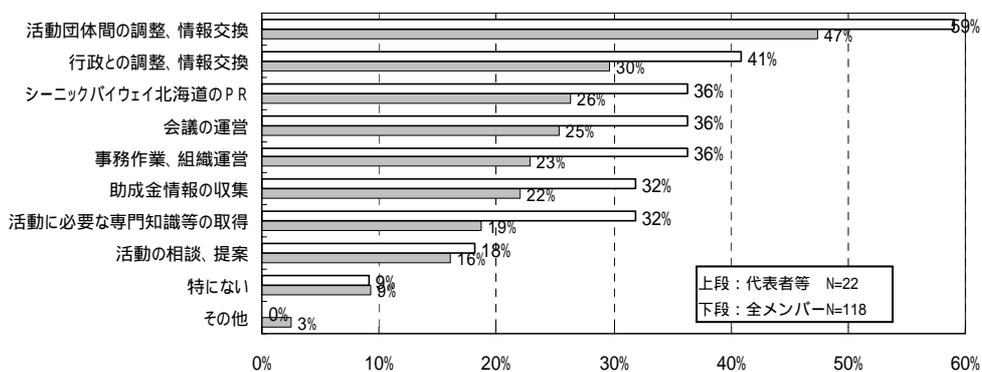
図表 2.22 リソースセンター（支援センター）の良い点（活動団体アンケート）



図表 2.23 リソースセンター（支援センター）に期待する役割（活動団体アンケート）



図表 2.24 地域で代行できるリソースセンター（支援センター）の役割（活動団体アンケート）



米国シーニックバイウェイ制度の研究と連携

- 内容
- ・FHWA（米国連邦道路局）担当者の招聘、現地視察による情報交換、既往資料による制度の研究
 - ・米国リソースセンタースタッフからのヒアリング調査
- 成果
- ・米国リソースセンターの主な機能（調査、プロモーション、人材育成、認定支援等）の把握
 - ・運営体制の把握

米国シーニックバイウェイ制度の概要

1. 米国シーニックバイウェイ制度検討・推進の経緯

- 1930年代 パークウェイ整備開始
- 1965年 道路美化法制定
- 1980年代 州際道路（高速道路）網概成
- 1987年 大統領の諮問委員会「米国民のアウトドア活動に関する委員会」“シーニックバイウェイ制度”答申
- 1989年 シーニックバイウェイ法制定
- 1991年 ISTEA（総合陸上輸送効率化法）制定
 - ・特例制度としてシーニックバイウェイ制度を創設（認定制度、助成制度、諮問委員会創設）
- 1992年 シーニックバイウェイ国家諮問委員会設置（1993年報告書提出）
- 1996年 シーニックバイウェイ第1回認定（20ルート、以降2年毎に追加認定）
- 1997年 TEA-21（交通機会均等法：ISTEA後継法）制定
- 1998年 リソースセンター創設
- 2003年 第1回ベストプラクティス賞選定
- 2004年 SAFETEA 制定予定（TEA-21後継法）

2. 米国シーニックバイウェイ制度の概要

シーニックバイウェイの認定種別（州認定・連邦認定の2段階システム）

・連邦認定シーニックバイウェイ

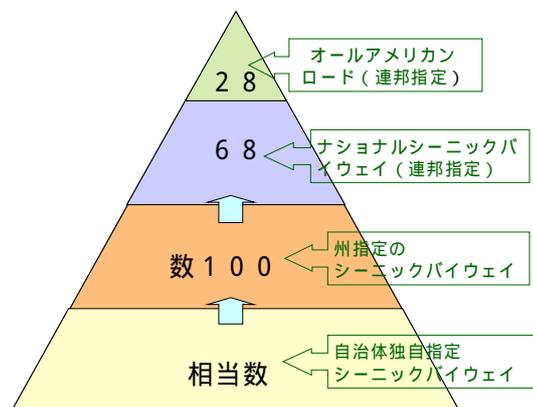
オールアメリカンロード 28ルート、ナショナルシーニックバイウェイ 68ルート

・州認定シーニックバイウェイ 500ルート以上（連邦認定のための必要条件）

認定の流れ

バイウェイ運営組織は州道路局を通して（州道路局の推薦が必要）、連邦道路局に申請。連邦道路局は評価委員会に諮問し、運輸省長官が認定

図表 2.25 米国シーニックバイウェイの認定種別



FHWA 担当者による講演の様子

3. 米国連邦道路局の役割

- ・申請受付：2年に1回実施
- ・認定：運輸長官が評価委員会に諮問し、答申を受け認定
- ・補助金申請：毎年バイウェイ運営組織から州道路局を通して、連邦道路局に申請。
- ・補助金交付：連邦道路局から各州道路局を通じてバイウェイ運営組織に交付、1998～2003まで総額1.48億ドル：年平均32億円（TEA-21）
- ・マーケティング：マップ、HP等による広報、自動車、観光関連団体との共同マーケティング等）

4. 補助対象事業の種類

- ・州のシーニックバイウェイ制度の計画・設計・改善
- ・コリドー運営計画策定事業
- ・道路交通安全関連事業
- ・バイウェイ沿いの施設整備事業（歩行者・自転車用施設、待避所、展望台、説明板等）
- ・レクリエーションエリアへのアクセス向上事業
- ・地域資源の保全事業
- ・旅行者等への情報提供マーケティング事業

5. バイウェイ運営組織への支援

連邦政府からのシーニックバイウェイ補助金給付

州・連邦レベルのマーケティングによる知名度の向上

リソースセンターによる技術的支援、プロモーション支援(1998年以降)

表彰制度：優秀な実践例・成功例をベストプラクティスとして表彰（2003年以降：詳細は7.を参照）

6. リソースセンターの機能

ルートおよび活動団体に関わる技術的支援

- ・組織の構築、助成金申請、助成金の運用、企画立案、地域のリーダーシップなど
- 活動団体の活動および運営に関わる教育および訓練
- ・全米会議の開催、ベストプラクティスの選定、新たなルートにおけるオリエンテーション、パワー・ワークショップなど研究会の開催など
- ルートおよび活動団体相互のコミュニケーションおよび連携の活性化
- ・バイウェイ相互による情報交換会の開催、情報紙「VISTA」ほか刊行物の制作・出版など



米国リソースセンター長との意見交換

(旭川市)



米国リソースセンターでの意見交換

(米国ミネソタ州ダルス)

7. ベストプラクティス 2003 の選定

米国シーニックバイウェイ制度では、優秀な実践例、成功例を有益な情報として共有するとともに、活動に対する誇りの醸成を目的として、連邦道路庁、AASHTO（米国運輸交通担当者協会）、リソースセンターなどの共同事業でベストプラクティスの選定をしている。シーニックバイウェイ制度において、課題となっている6つのテーマ（マーケティング、環境保全、可能性の発見と実行、一般市民の啓発、財源の確保、インタープリテーション）について募集され、12のルートが選ばれた。

図表 2.26 米国ベストプラクティス 2003 の6テーマ



【環境保全部門】
マウンテントゥサウンドグリーンウェイでは、旧林道をボランティアが復元している

【マーケティング部門】
クレオールネイチャートレイルでは、マーケティング計画を策定し、積極的な利用促進を展開



1.3 ルート運営活動内容に関する試行

1.3.1 景観資源の保全・改善等に関する試行

(1) 地域住民が主体となった景観改善への新たな取り組み 利用されていない看板の撤去による美しい沿道景観づくり

内容 ・旭川～占冠ルート景観分科会による沿道看板調査を行い、利用されていない看板について地元の持ち主に交渉し、看板を撤去

成果 ・地域住民主体の沿道景観整備可能性の検証

課題 ・他地域における同様な活動の展開

NPO法人グランドワーク西神楽による看板撤去の事例

NPO法人グランドワーク西神楽では、民間敷地も含めた景観形成の一環として、不要看板の撤去を行った。

看板には、商業看板のみならず交通安全など多目的、多所有者によるため、その必要性を踏まえると全てを撤去するには至らない。

しかしながら、この団体では、看板撤去推進への足がかりとして、地元で活動団体が声のかけやすい所有者に対して撤去の依頼を行い、4つの看板を撤去することができた。

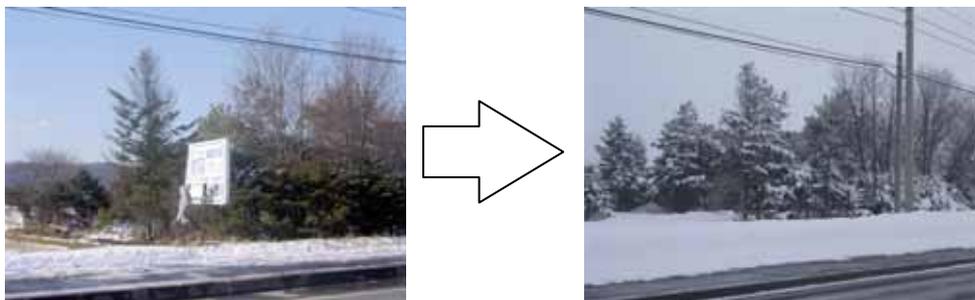
図表 2.27 看板撤去の事例

事例	所有者	相談先
破れている旗の撤去	地域団体	地域団体
古くなった固定サインの撤去	地域団体	地域団体
破損している固定広告物の撤去	民間会社（現在は倒産）	土地所有者
選挙時期ではない選挙看板	候補者個人	候補者個人

今回の撤去において、以下のことが撤去の成功に結びついたと思われる。

- ・所有者とNPOが個人的なつながりの中から足がかりをみつけることができた。
- ・広告物の破損などにより本来の役割を持たない看板を手早くみつけることができた。

このほか、撤去しにくい看板に関しては、地権者・広告主への労力や撤去費用の支援なども同時に検討することが必要である。また、地域住民なども含めた景観への配慮を促す教育的な活動など、長期的な対策が必要である。



旭川市西神楽地区における看板撤去の前後比較

行政と地域住民との協働による道路景観診断

- 内容 ・各地で道路管理者と地域住民が協働した沿道景観診断を実施
- 成果 ・景観整備意識の向上
- 課題 ・景観整備における合意形成、改善へのステップアップ

北海道開発局による住民が参加した道路景観診断の事例

北海道開発局では、平成 15 年度より住民参加により道路景観診断を実施している。モデルルートでは、7 区間 84km、北海道全体で 13 区間 183km にも及んでいる。2 年の実施によって住民からの景観に対する意見も増え、具体的な住民参加の機運も高まってきている。今後は、住民との合意形成による各種景観改善・保全事業への反映やより効率的・効果的な調査方法の確立、長期的な視野での意識向上の取組の重要性が高まっている。

図表 2.28 道路景観診断の実施区間（平成 16 年度）

開発建設部	対象国道名	実施地域
札幌	国道 276 号	千歳市 美笛（美笛峠）～水明郷（水明郷交差点）
函館	国道 278 号	函館市日乃出町～恵山町日ノ浜
小樽	国道 276 号（国道 230 号）	喜茂別町留産～喜茂別町双葉
旭川	国道 237 号	旭川市西神楽～美瑛町市街
	国道 237 号	中富良野町西中
	国道 237 号(38 号重複区間)	富良野市山部
室蘭	国道 453 号と 276 号	大滝村管内（壮瞥町町界～滝笛トンネル）
釧路	国道 240 号	釧路市鶴丘
	国道 272 号	中標津町市街(道道中標津空港線との交差点から知床方面)
帯広	国道 236 号	中札内村
網走	国道 334 号	斜里町青葉交差点～宇登呂ブユニ岬
留萌	国道 231 号	増毛町暑寒町 1 丁目～南暑寒町 8 丁目
稚内	国道 238 号	稚内市 宗谷村字珊内～字豊岩（宗谷岬）



道路景観診断シート



道路景観診断の様子（札幌開発建設部）

行政と地域住民の協働による橋梁の景観検討

- 内容 ・千歳～ニセコルート景観分科会では、国道 230 号尻別橋架け換えにあたり橋の景観等についての意見交換を実施
- 成果 ・地域住民の景観整備意識の向上
 ・行政の地域住民ニーズおよび景観整備意識の向上
- 課題 ・他地域における景観検討活動の活発化

地域景観の保全・改善を目的とした景観検討

千歳～ニセコルート景観分科会では、小樽開発建設部の要請により、架け換えが予定されている一般国道 230 号尻別橋の景観等についての検討会を実施した。

実際に現場見学を行い、事業者との意見交換を行うことにより、事業の現実感が高まり、地域住民の景観整備に対する意識の向上を促すことができた。また、事業者は地域住民ニーズを把握することができ、事業者自身も景観整備意識の向上につながった。

このように、景観に対する検討が必要な事業箇所については、活発に検討会の開催などを通して、住民参加による景観整備が必要である。

主な意見の概要

- ・ 亜鉛メッキは使用しないほうが良い
 - ・ 計画地は“水辺の楽校”もあり、多くの人が見上げる目に触れる場所
 - ・ ニセコの玄関口であるということも考慮してほしい
- ほか意見多数



現地視察と意見交換会の様子（H15 年度第 4 回景観分科会にて）

地域住民の広範な参加による沿道景観整備活動

- 内容 ・千歳青年会議所、ニセコ 21 世紀まちづくり実行委員会等、各地で地域住民の参加による沿道植栽を実施
- 成果 ・沿道景観整備への住民参加の拡大
- 課題 ・参加住民の拡大や活動の持続

～千歳エアポート花ロード 36～における住民参加による植栽活動

一般国道 36 号は、年間 1,800 万人の人々が利用する北海道の玄関口である新千歳空港へのアクセス道路であり、空港を降り立つ人々に北海道の印象を最初に与える場所となっている。

そこで、一般国道 36 号を北の玄関口として相応しい環境となるよう、札幌開発建設部のボランティアサポートプログラムの一環として、花の苗の提供や作業の安全の確保などを実施し、小学校や一般市民のボランティアと共に花植えを実施した。

人々を迎え入れる活動を育み、来訪者に対して良い心象を抱いて頂く環境作りを目的として、シーニックバイウェイ千歳恵庭エリア連絡協議会、千歳市、(財)千歳市公園緑化協会、千歳フラワーマスターの会千歳市桜木小学校(5年生・教諭・父兄)一般市民ボランティアなどが参加して植栽活動を行った。

一般国道 36 号の対象区間は、沿道住民がおらず花の管理が困難かつ交通量が多いため、移動時の安全確保の問題などが課題となっている。

そこで、「一年草」と「宿根草」の植栽や千歳青年会議所により、安全警備・誘導を行った。また、フラワーマスターの協力により、子供たちに植栽の仕方を指導した。

一般住民を巻き込んだ活動ができ、自分たちの住む地域に対する関心が高まり、シーニックバイウェイ制度の周知にもつながった。



グループに分かれて花植作業



植栽の様子



植栽活動の参加者

試行をきっかけとした地域連携による景観形成

- 内容 ・洞爺エリア 5 団体が清掃・植栽活動で連携
 成果 ・活動団体の広域連携
 課題 ・連携の拡大や活動の持続

活動団体の連携による沿道景観の保全・改善を目的とした道路清掃活動

一般国道 453 号を中心に、大滝村～壮瞥町～虻田町洞爺湖温泉の沿道清掃（453(ヨゴサン)キャンペーン）を行った。活動の延長が長距離にわたるため、あらかじめ清掃箇所を選定し、一般国道 453 号沿道と洞爺湖方面に向かうルートとした。

- ・1号車：洞爺湖温泉公共駐車場 サンパレス前 洞爺湖園地 いこい荘前 上長和駐車場公園
一般国道 453 号(長和市街地～小学校前)
- ・2号車：一般国道 453 号(道の駅 フォレスト大滝 276 一般国道 276 号・453 号交点駐車場 優徳駐車場公園 蟠溪駐車場 そうべつくだもの村)

参加者募集人数や募集範囲や清掃に必要な物品をそろえること、ゴミ回収車の手配などが課題となったが、室蘭開発建設部によりボランティアサポートプログラムへの登録や関係者との綿密な協議によって、課題を解決することができた。



回収車にゴミを集める



葡萄棚の下での交流会

- ・連携事業第 1 回目ということで、参加呼びかけについてはあまり広域的にせず、町村住民に対して行うこととした。方法は、役場が発行している広報にチラシを同封する、ホームページやメーリングリストで呼びかけるなど。
- ・ボランティアサポートプログラムを併せて利用。ゴミの回収は、室蘭開発建設部および室蘭土木現業所によって行われた。
- ・事前に、活動後の交流会を案内することによって、「453 キャンペーン」への参加の動機付けをすることができた。

この活動の実施は、複数の団体が協同で事業を実施したことにより、団体間相互、団体と行政間、行政間相互の交流を促進することとなり、地域の一体感が生まれた。また、清掃だけでなく、歩くことで新たな地域の魅力あるいは欠点を見つけることができた。さらに、一般住民を巻き込んだ活動によって、シーニックバイウェイ制度の周知にも繋がった。

活動団体の連携による沿道景観の保全・改善を目的とした道路清掃活動

千歳～ニセコルート千歳エリア連絡会では、これまでも実施している支笏湖周辺の清掃活動をシーニックバイウェイ制度導入モデル試行の活動と位置づけて清掃活動を実施した。この活動は、実施日の5月30日にちなんだゴミゼロ(530)運動と、そうべつくだもの村が以前から実施している「453(ヨゴサン)キャンペーン」に連動し、「453(よごさん)530(ゴミゼロ)キャンペーン」として活動した。(清掃区間は、国道453号支笏湖湖畔(旧有料道路料金所付近)～苫小牧の約5km)

この活動対象となった一般国道453号は、札幌市～支笏湖～大滝村・壮瞥町～苫小牧市に至るルートで、札幌開発建設部および室蘭開発建設部の管轄となっている。それぞれの団体は、シーニックバイウェイの参加以前より、個別に清掃活動を実施していた。今回、シーニックバイウェイ制度検討モデル試行への参加によって、支笏湖周辺と壮瞥町で類似した活動を行っているという共通認識が生まれ、千歳～ニセコルート千歳エリア連絡会が壮瞥町の「453(ヨゴサン)キャンペーン」に連動することとなった。今回の活動は、名称だけの連携にとどまっているが、今後は地域間の情報交換の促進によって、新たな展開が期待されている。



453(よごさん)530(ゴミゼロ)キャンペーンの様子

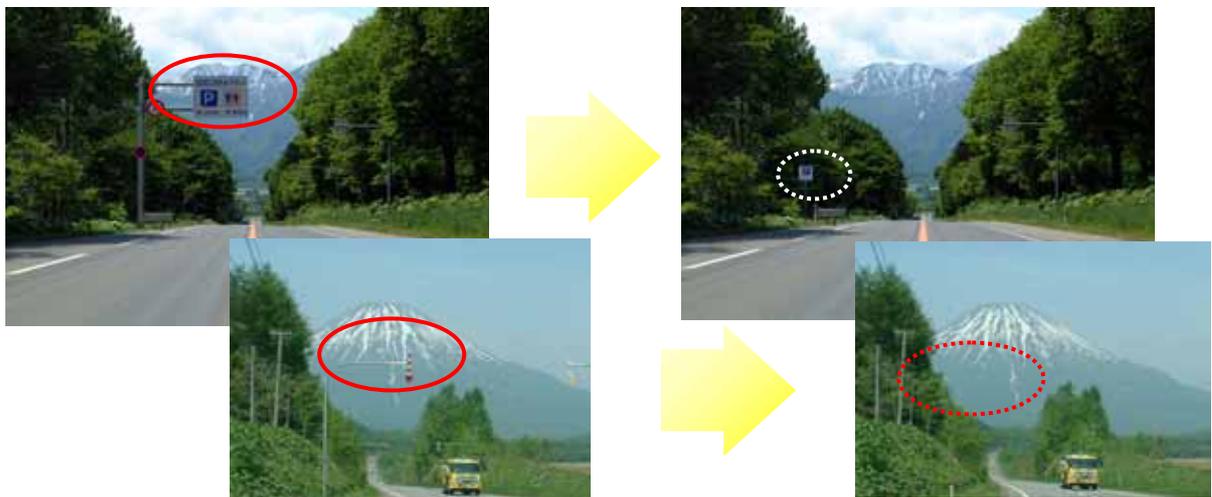
行政の沿道景観改善に関する取組

(試 行)

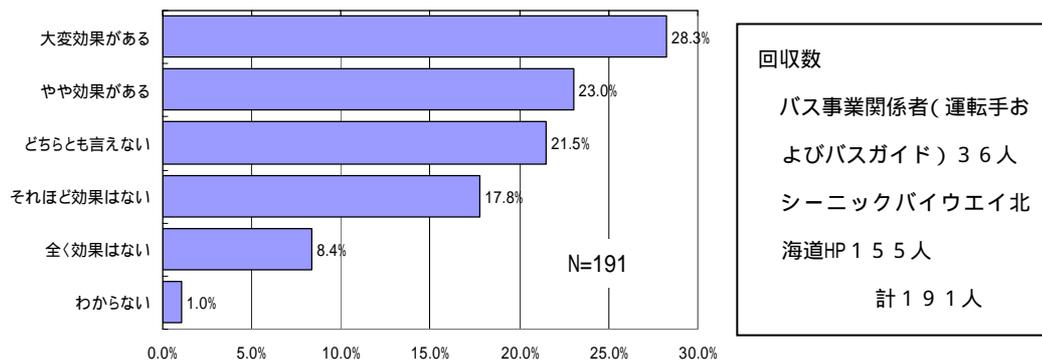
- 内容 ・ モデルルート内における道路付属物の改善（夏期間の矢羽根等一時撤去）
 ・ 沿道景観改善のための社会資本整備事例の収集
- 成果 ・ 矢羽根等一時撤去事業に対し、51%が「効果あり」と回答（アンケート調査より）
- 課題 ・ 沿道景観改善における他事業者、地域住民との合意形成の必要性

モデルルート内における夏期間の矢羽根等撤去の試行事例

北海道開発局では、平成 15 年度に沿道景観の向上に向けて、夏期間の矢羽根等撤去を試行した。試行区間は 5 区間 5.4km であり、下の写真のように景観が改善された。インターネットとバス事業者へのアンケートの結果 51%が効果ありとなったが、矢羽根等撤去に対しては様々な意見がよせられた。



図表 2.29 矢羽根等撤去に対する効果（開発局アンケート調査）



費用対効果を考えて
 設置および撤去にかかる費用の低廉化に努めること。また費用に見合うような景観改善効果が得られるような事業箇所の適切な選択が必要
 矢羽根は北海道らしい景観要素
 特に、北海道外の旅行者は、矢羽根は北海道らしい景観要素として認識しているという意見も多い。また場合によっては北海道らしい景観資源としての価値も考えられる
 矢羽根だけでは効果がうすく、他の景観障害物改善との連携を
 矢羽根だけではなく、商業用広告看板や電柱・電線、ゴミ捨て場などの撤去や改善を合わせて行っていかないと、景観改善効果は低いものとなる
 交通安全を最優先に
 効果は評価するが、交通安全上必要な場合もあり、何でも撤去するだけではなく、景観になじむデザインや設置間隔の適正化といった改善も必要

(事業の実施)

- 内容 ・ 景観形成事業推進費や北海道広域連携モデル事業による沿道景観整備
- 成果 ・ 地域住民との合意形成を図った上での社会資本整備の実施
- 課題 ・ 地域住民の景観に対する意識向上や事業への住民・来訪者のニーズの反映

北海道開発局による道路景観整備の事例

国土交通省では、平成 16 年度景観形成事業推進費を創設し、電線類の地中化、世界遺産登録地域における案内標識等の整備など、良好な景観形成に資する事業を推進し、豊かで質の高い国民生活の実現に向けて良好な景観形成を図るとともに、観光立国の推進をしている。

モデルルートでも防護柵の整備、植樹、収納型防雪柵の整備などの事業が実施され、良好な景観形成に係る公共事業を推進している。

この事業推進費によって、北海道開発局小樽開発建設部では、一般国道 276 号京極町地域で景勝地における駐車場整備を実施した。実施にあたっては、積極的に地域との合意形成を図るべく、「タウンウォッチング」「ワークショップ」「現地説明会・意見交換会」などを綿密に行った。迅速な事業の実施を可能にした要因は、このようなさまざまな機会を活かして地域と自治体、開発局の信頼関係を醸成し、官民協働体制が構築されたこと、参加者の意識が高く、景観診断や現地検討会、ワークショップなど常に協働で協議・検討を行ったことである。

しかしながら、地域によって景観や官民の協働への意識の差があるため、タウンミーティングなどを積極的に企画し、意識を高めてもらうようにすることや地域住民や来訪者のニーズを把握し事業に反映させる仕組みが必要であり、地域と如何に接し、ニーズを把握するか弾力的な展開が必要だと考えられる。

図表 2.30 一般国道 276 号京極町地域駐車場整備の流れ



北海道広域連携モデル事業による道路景観整備

北海道広域連携モデル事業は、北海道における地方の自主性・裁量性を最大限に活かした広域的な地域づくりを試行的に実施することにより、地方の実情に応じたより効果的、効率的な社会資本整備の推進を図ることを目的として創設された。

北海道は、平成16年度から19年度までの4年間の計画期間で、広域的な課題に対して達成すべき成果目標を定め、必要な事業等を取りまとめ、国土交通省の同意を得て「北海道広域連携モデル事業計画」(平成16年8月)を策定した。テーマの設定にあたっては、大規模な災害の頻発、自然環境保全の動きの活発化、外国人観光客の増加など、地域の実情、近年の課題等を踏まえつつ、公共事業の実施により広範な効果が期待される分野として、「豊かな自然環境の保全」、「魅力あふれる北海道観光の形成」、「災害に強い地域づくり」の3テーマを設定した。

モデルルートでは、「魅力あふれる北海道観光の形成」というテーマに基づいて、千歳～ニセコルート(延べ8路線9箇所)と旭川～占冠ルート(延べ12路線13箇所)において、事業が実施されている。

北海道広域連携モデル事業計画の特色

- 事業分野にとらわれない予算の執行
- 地域特性を反映させた重点テーマの設定
- 道内の直近の課題や地域の実情等を踏まえ、事業分野にとらわれない独自のテーマを設定
- 緊急的に必要な事業への配分
- これまでの事業別に設定された予算枠にとらわれず、地域の突発的・短期的な課題に対応した事業を集中的に実施
- 各種施策を組み合わせた複合的な施策の展開
- 分野が異なる各種公共事業の連携や各事業者の連携による、効率的・効果的な事業の実施個別の事業展開ではなく、各種事業の横断的な事業展開や、国・道・市町村のより密接な連携など、より広域的な視点に立った複合型の事業展開
- 事業効果の早期発現
- 集中的な事業の実施
- 課題に対して達成すべき成果目標を定め、4年間の計画期間に集中的に事業を実施することにより、事業効果の早期発現

図表 2.31 平成16年度北海道広域連携モデル事業計画におけるシーニックバイウェイ北海道関連事業箇所



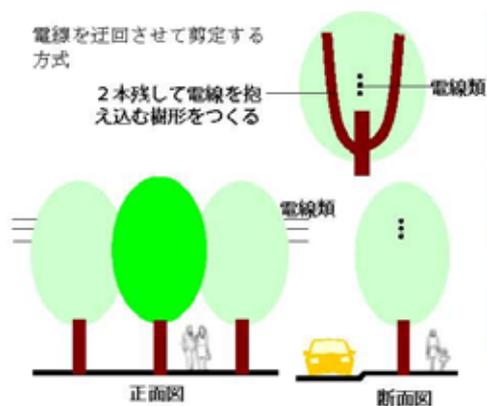
景勝地における景観に配慮した電線類の配置事例

国土交通省では、無電柱化推進計画を策定するなど、安全で快適な通行空間の確保、沿道景観の向上、観光振興、地域活性化等の観点から景観に配慮した電線類の配置が積極的に行われている。電線管理者、地方公共団体、地域住民等が三位一体となった密接な協力のもと、これまでの幹線道路に加え、主要な非幹線道路も対象として積極的に推進している。

北海道開発局では、電線類の地中化などの無電柱化事業の実施によって、景観に配慮した電線類の配置を行い地域住民から賛同の声が寄せられている。また、電線類地中化や無電柱化が困難な地域においては、電柱の着色、電柱電線の片寄せや街路樹により配線を隠すなど、景観に配慮した道路整備を進めている。今後とも、電線管理者等、地方公共団体、道路管理者の協力により、沿道景観への配慮が必要である。



電柱の着色による景観への配慮（一般国道 453 号） 電柱電線の片寄せによる景観への配慮（一般国道 273 号）



写真：電線迂回型剪定の事例
破線丸印：電線

街路樹により隠された電線類の事例

北海道スタンダード型道路整備の展開

- 内容 ・ 国道 276 号岩内共和道路で沿道景観に配慮した道路整備を展開予定
 成果 ・ 北海道の地域特性を活かした景観に配慮した道路の提案

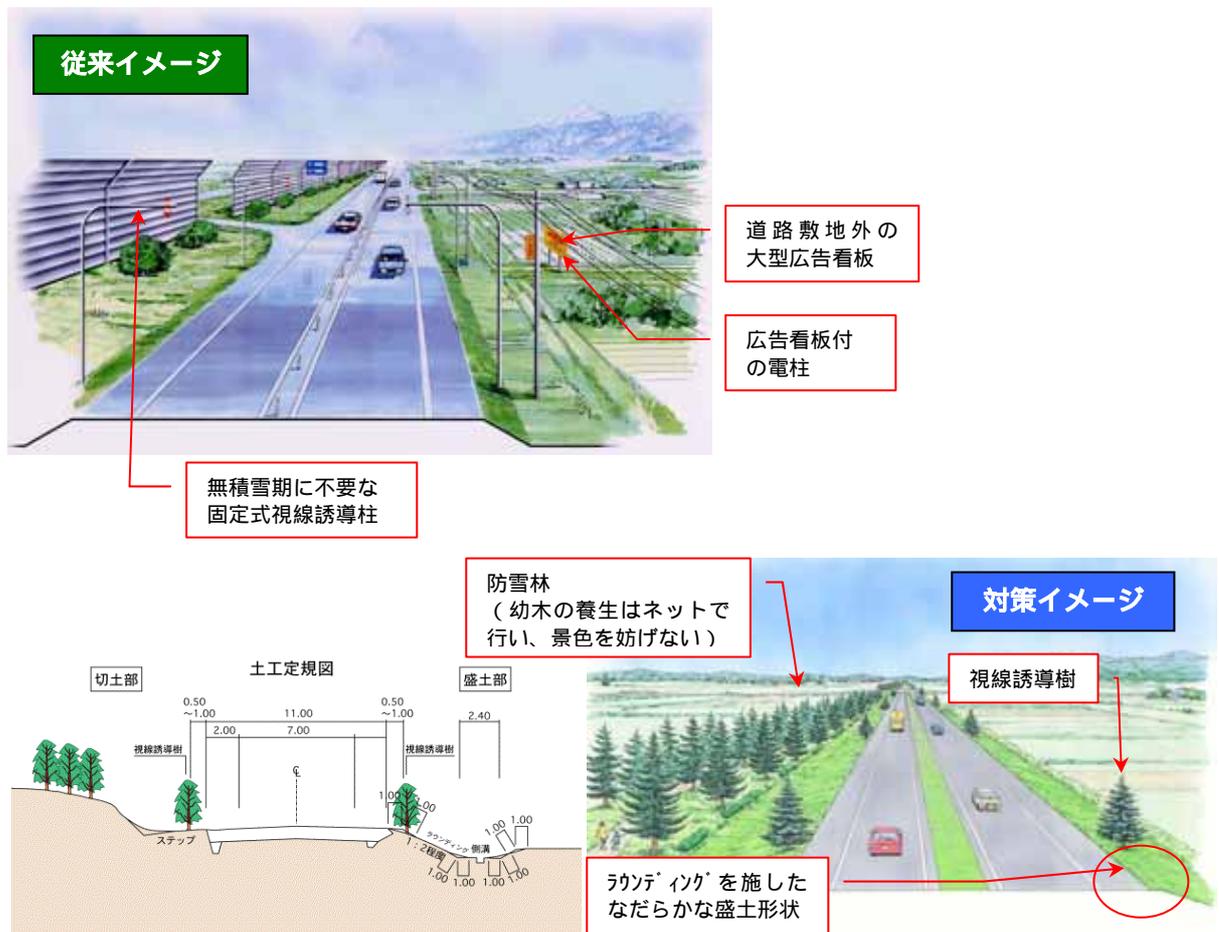
一般国道 276 号岩内共和道路で沿道景観に配慮した道路整備

一般国道 276 号岩内共和道路は、道央圏後志支庁管内南西部に位置し、冬は降雪量の非常に多い地域を通る路線である。このため、冬期間の地吹雪による視程障害改善、物流拠点である岩内港や農産物集積基地へのアクセス改善、夏期交通混雑の解消、緊急輸送路の確保、広域交流の促進及び地域の活性化などを目的に、旧国鉄岩内線跡地を活用した改築事業を行っている。

このような路線であるため、種々の道路付属物の設置が避けられないことから、沿道景観に配慮した道路整備を行うこととし、有識者による「岩内共和道路検討委員会(斎藤新一郎委員長(前専修大学北海道短期大学教授))」のもと検討を行ってきた。

北海道開発局では、この路線を北海道スタンダード型の道路整備の先進事例と位置づけて、事業を行っているところである。

図表 2.32 北海道スタンダード型道路構造の模式図 (一般国道 276 号岩内共和道路)



(2) 地域住民が主体となった景観資源活用への取り組み

景観資源を活用したビジネス創造

- 内容 ・ 景観眺望地点における休憩施設の設置および、コーヒー等のサービス提供
- 成果 ・ 景観（見る観光）への付加価値付与による新規ビジネスの可能性
 - ・ 周遊バスとの組み合わせによるツアー魅力度の向上
- 課題 ・ 地域産業との連携
 - ・ 事業化に向けた検討

地域景勝箇所でのカフェ設置による景観資源活用ビジネスモデルの試行

良好な沿道景観ポイントにデッキ・テーブル・ベンチのある休憩施設を設置し、さらにカフェ機能を付随することで景観資源を活用したビジネスの創造を展開した。

実施箇所は、千歳～ニセコルートニセコエリアにおいて、倶知安町北4線（町道）喜茂別町中山峠（一般国道230号）喜茂別町牧場タカラ（一般国道276号沿線）ニセコ町アイニセコ（町道沿線）蘭越町日の出（道道66号沿線）の5箇所である。

新聞社に対する投げ込み、チラシの作成と宿泊施設へのチラシ・ポスターの掲示、中山峠によるPRをリソースセンターから提案した。また、新聞社への投げ込みは団体が実施した。

期間途中より、団場で考案し、スタンプラリーやカフェの位置図を記したマップを作成・配布し、PRに努めた。その結果、自治体の景観ポイントを巡る視察ルートのポイントとして紹介されるなど、活動の広がりが確認された。

アンケート調査でも、各箇所とも利用者の満足度が高く評価されたことにより、実施主体の活動団体の満足度向上につながった。



アイニセコのカフェ

参加型景観資源発掘活動

- 内容 ・ ホームページ上で写真投稿を実施
- 成果 ・ 潜在的景観資源関連写真データの蓄積
- 課題 ・ 景観整備意識高揚のための誘導方策
- ・ 広報等における写真データの活用

一般道民の参加による景観資源の発掘を目的としたフォトコンテスト

(社)北海道開発技術センターでは、写真を通じた活動によって『美しく個性的な北海道』を発見し、北海道の魅力を啓蒙していくことを目的にフォトコンテストを実施した。

「シーニックフォト倶楽部」の会員によって投稿された北海道の美しい景観の写真のホームページでの発表、写真投稿イベントの開催など北海道の地域活動団体等が主催するイベント、フォトコンテスト等への積極的な参加を推進している。フォトコンテストは、このフォト倶楽部会員へのサービスの一環として行われている。また、当倶楽部では、メールマガジンを毎月発行(登録者数はメール：120人、郵送：125人 計245人)している。

フォトコンテストの開催によって、写真の収集数の増加が顕著にみられた。また、写真という切り口によって、シーニックバイウェイ北海道の取り組みを、写真愛好家という景観に関心が高い層に積極的に啓発することができた。

図表 2.33 コンテスト応募作品数の内訳：

ルート別	旭川～占冠ルート	25点	計 112点
	千歳～ニセコルート	25点	
	その他地域	62点	
季節別	春	26点	計 112点
	夏	59点	
	秋	20点	
	冬	7点	



旭川～占冠ルート 富良野・7月

今後、会員およびストック写真の増加や広報資料としての活用方法などを模索している。また、収集した写真を地域団体の広報でも活用できるようなシステム作りが必要となっている。

写真の収集にあたっては、季節によって写真枚数の差が出るため、四季を通じた写真の収集が必要である。



千歳～ニセコルート 神仙沼・10月

地域住民主体の地域資源調査

- 内容 ・千歳～ニセコルート景観分科会による地域資源調査（現地踏査）の実施
- 成果 ・地域住民による地域資源の再認識
- 課題 ・新たな観光資源としての活用策の検討

地域資源の発掘・活用を目的とした景観資源調査

千歳～ニセコルート景観分科会およびWAO・共和町商工会青年部の連携事業として、景観資源調査を行った。

景観分科会

- 第1回 平成15年12月17日 ルートの景観づくり・活動の方向性について
- 第2回 平成16年1月10日 ルートの景観資源診断と今後の取り組みについて
- 第3回 平成16年3月17日 河川景観ポイントと橋梁の架け替えの現地見学・意見交換

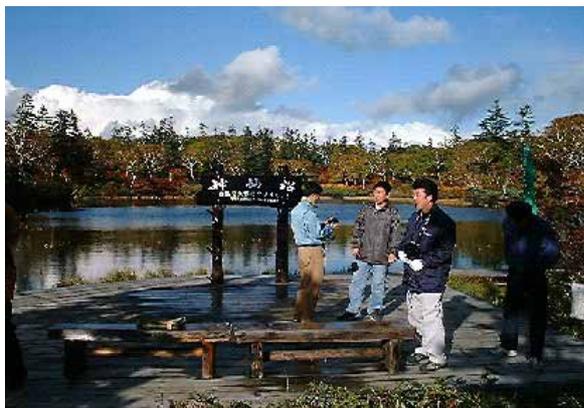
WAO景観資源調査

- 第1回 平成15年8月8日 ニセコ町周辺
- 第2回 平成15年10月6日（共和町商工会青年部合同調査） 神仙沼周辺

調査の実施によって、複数の団体が協同で事業を実施したことにより、団体間の交流と一体感が生まれた。また、隣接する市町村の在住者であっても、地域資源に対する評価の違いが明確になった。

季節毎のキメの細かい調査の実施や事業実施予算の確保、より広範な参加者によって、景観資源調査を地域アイデンティティの醸成に役立てていくことが必要である。

景観資源調査にあたっては、効果的で客観的な調査の実施手法のノウハウがないことから、写真の収集にとどまっている。景観の専門家を交えた調査の実施および調査結果の活用方法などのノウハウの蓄積が課題となった。



地域資源診断実施の様子（神仙沼）

1.3.2 地域資源の保全・改善等に関する試行

潜在的な地域資源体験型ツアー（エコツアー）の事業化

- 内容 ・ かなやま湖の森 2212 によるゼロの山登山体験ツアーの実施
- 成果 ・ 潜在的な地域資源活用型ツアーの可能性が確認
- 課題 ・ 地域資源を活かした多様な体験メニューの開発とガイド等の育成
・ 経営的視点にたった事業継続性の検討

ゼロの山登山体験会

かなやま湖の森 2212 では、かなやま湖と周囲の山々を一望できる頂上をもつ素晴らしい景観の山が標高 740m の通称「ゼロの山」の登山ツアーを実施した。このゼロの山は、地図にもその名前はなく、これまで登山道も整備されていなかったため、一部の人のみを知る“幻の山”となっていた。この山頂からは南富良野町にあるかなやま湖や周囲の山々が見渡すことができる。下は小学 3 年生から上は 75 歳までの 30 人程が参加し、平成 16 年 9 月 23 日に実施された。

当初、登山道が整備されたばかりで、対象となる利用者層が絞れなかったが、今回のツアー実施によって幅広い年齢層が楽しんで登れる山だということが確認された。また、今までカヌーなどウォータースポーツがメインだったかなやま湖のレジャーに、トレッキングという新しい要素として加えることができ、プロの自然ガイドが活躍する場になることが期待されている。



ゼロの山からのかなやま湖の眺望



ゼロの山への登山

域内周遊バスツアーの事業化

- 内容 ・ (株)ニセコリゾート観光協会、WAO、ニセコ広域観光委員会による羊蹄山一周ツアーバスの運行
- 成果 ・ 潜在的旅行者ニーズの発掘
・ 他団体活動との連携促進
- 課題 ・ 事業可能性の検討

域内周遊観光ビジネスの実地検証を目的とした羊蹄山麓周遊バスツアー

千歳～ニセコルートでは、(株)ニセコリゾート観光協会、WAO、ニセコ広域観光委員会が、沿道景観に優れた羊蹄山の周りを1周する周遊バスツアーを実施し、域内周遊観光ビジネスの実証研究を行った。また、ガイドマニュアルを作成し、継続的なビジネス化にむけた参考資料とした。

運行期間

平成16年9/4～10/3までの土日祝と9/18～26の毎日
に午前・午後の2回運行(計16日間)
ただし、9/18～26は昔なつかしいボンネットバス「まき太郎」で巡り、それ以外は小型バスを使用した。



ボンネットバス「まき太郎」

参加者の募集にあたっては、新聞折り込みによる近隣住民への告知、宿泊事業者に対する案内、一般観光客に対するチラシ配布、HPによる告知、媒体社へのリリースの送付による参加者募集を行った。また、利用者に対してアンケート調査を実施し、周遊バスのニーズと今後の可能性の把握に努めた。また宿泊事業者向けにモニターバスを運行し、試乗してもらい、ツアーに対する評価および今後の課題について示唆を頂いた。

期間を通じて新聞など各種メディアに取り上げられたことによって、札幌近郊や遠方からの観光客が乗車した。乗客数は、15日間計30回(定員20～21名)の運行で、488名が乗車し、平均乗車率は80.3%と高い乗車率となった。また、乗客へのアンケート結果によれば、85.1%が「また乗りたい」としており、事業者自身も、利用者の好評価に応じて、次年度の事業化の具体化を模索している。

この事業によって、潜在的旅行者ニーズの発掘をすることができた。また、羊蹄山麓を1周するという長距離のツアーであることから、他団体活動との連携が重要となっており、今後、団体間の連携の強化が期待される。

アンケート調査結果

- ・ 参加者は、主に札幌近郊（43.3%）、ニセコ近郊（28.1%）が占め、一方、道外居住者も10.5%いた。
- ・ バスツアーに対する評価は、「大いに満足（46.5%）」、「満足（35.9%）」、「やや満足（4.4%）」を含めると80.4%が満足したと回答。主な理由として、「ガイド・運転手がよかった（56名）」というホスピタリティに対する評価、「景観がすばらしかった（45名）」という沿道景観への評価、「普段行けないところを見ることができた（38名）」のツアーの意外性が評価された。
- ・ 一方、「普通」「やや不満」と回答した主な理由は、「バスの快適性への不満（シートが座りにくい）」、「時間が短い」という評価がみられた。
- ・ 事業の継続性に対しては、「また乗車したいか」について「乗りたい（77.3%）」「やや乗りたい（7.8%）」を含めると85.1%が乗りたいといっている。
- ・ また、妥当なツアーの金額としては、500～1500円が6割を占めた。

1.3.3 その他活動に関する試行

外国人旅行者に対するホスピタリティ向上のための活動

- 内容 ・千歳～ニセコルートが連携し、英語研修、接客研修等を実施
成果 ・サービス産業従事者における対外国人旅行者へのホスピタリティ意識の向上
課題 ・資金調達など持続的な活動体制づくり

外国人旅行者に対するホスピタリティの向上を目的とした語学研修会

ニセコ観光国際部の会（ニセコ町）WAO（倶知安町）は、近年、ニセコ地域において増加している外国人旅行者に対する地域のホスピタリティ向上と、その啓発を目的とし、英語による旅行者対応の研修会を実施した。

開催概要

- ・ニセコ観光国際部の会 ニセコ英会話道場
第1回 平成15年10月9日 一般部門 ニセコ町民センター(和室羊蹄)19:30～21:00
第2回 平成15年10月16日 飲食部門 ニセコロフト倶楽部 19:30～21:00
第3回 平成15年10月23日 宿泊部門 ペンション 愛彩譜 19:30～21:00
第4回 平成16年3月31日 接客のための実用英会話 ホテル甘露の森 19:30～21:00
- ・WAO 簡単な日常英会話& 地域の魅力について考えるセミナー
第3回 平成15年12月12日 真狩村交流プラザ会議室 19:00～21:00
第4回 平成16年2月2日 蘭越町商工会会議室 18:30～20:00

これまで希薄だった外国人旅行者のホスピタリティ向上に対して、サービス産業従事者における意識の向上が図られた。



ニセコ英会話道場の様子

1.3.4 活動の集中化による連携事業活性化に関する試行

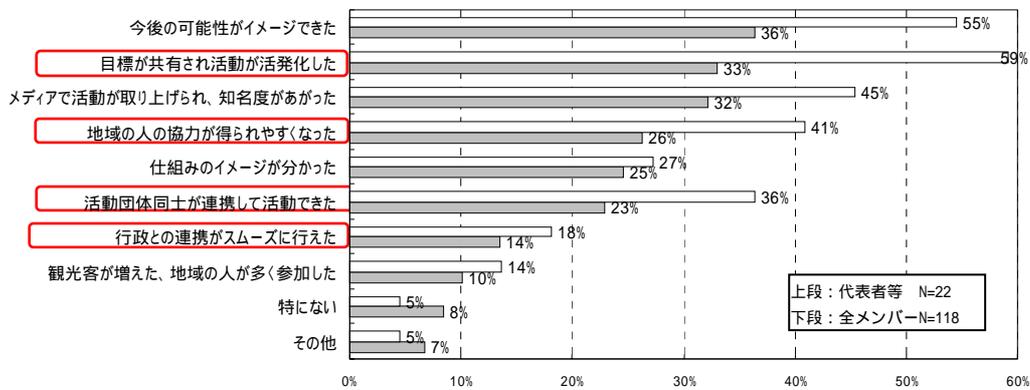
- 内容 ・ 活動実施集中月間を設置し、活動を実施。既往活動（イベント）等との連携
- 成果 ・ 活動の集中実施による試行事例の蓄積
 ・ 連携事業実施を通じた連携手法の蓄積
- 課題 ・ 集中活動の目標の明確化と目標達成のための活動間の調整・連携手法の構築
 ・ コンセプトやテーマを明確にした活動の実施

集中活動の実施による連携事業の活性化

「この秋・シーニックバイウェイツーリズムの提案」と題して、地域の文化歴史、産業(営み)、町並み、暮らし、自然等に触れながら、ゆったりとルートを巡るツーリングを推進した。9月4日～10月3日の1ヶ月間をシーニックバイウェイ集中活動月間として、活動団体及び行政が連携し、地域全体として広域的かつ集中的に美しい景観づくり、活力ある地域づくり、魅力ある観光空間づくりに試行的に取り組んだ結果、活動団体間、活動団体と自治体・行政間の連携事業推進において以下のような効果が確認された。

- ・ 目標が共有され活動が活発化した
- ・ 地域の人々の協力が得られやすくなった
- ・ 活動団体同士が連携して活動できた
- ・ 行政との連携がスムーズに行えた

図表 2.34 集中活動実施による効果（活動団体アンケート：複数回答）



情報拠点（星の家）



旭川～占冠ルートフォーラムの様子

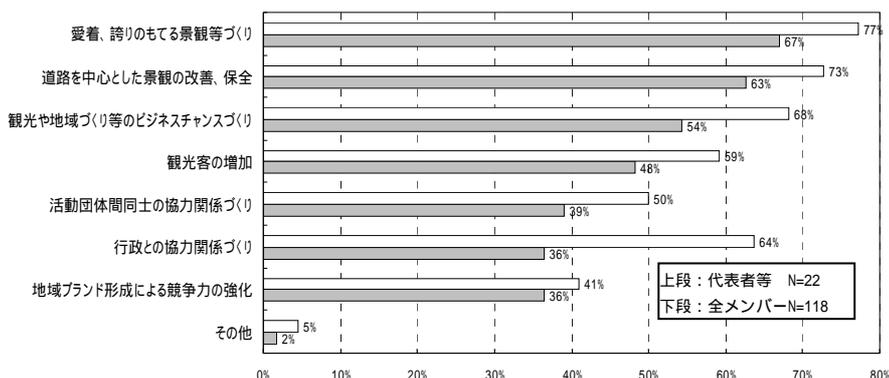
1.4 制度試行全般に対する活動団体の評価

- 内容 ・モデルルートにおける試行に対する活動団体アンケート・ヒアリング調査の実施
 成果 ・活動団体からみた制度全般、推進のあり方に対する課題の抽出
 課題 ・活動団体主体のルート運営のための適切な役割分担や動機付け、制度の理解促進
 ・より広範な地域住民参加や地域活動団体と行政との連携を促進するため、普段のコミュニケーションを図る意識が必要
 ・持続的な制度運営のための体制、運営、支援等の改善システムの構築

シーニックバイウェイ制度に対する期待

「愛着、誇りのもてる景観等づくり」、「道路を中心とした景観の改善、保全」、「観光や地域づくり等のビジネスチャンスづくり」が上位を占めている。全般的に活動に対してより主体的に関与している「代表者等」の方が、期待度は高い。特に、「行政との協力関係づくり」では「代表者等」が大きく上回っている。

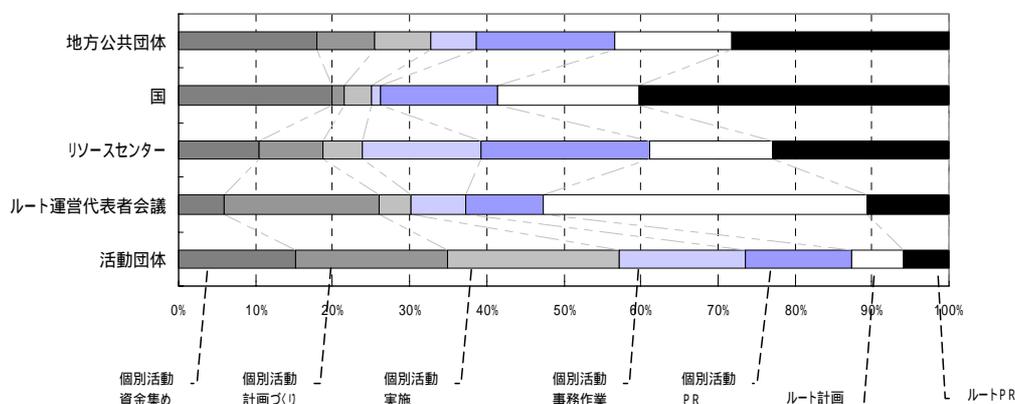
図表 2.35 シーニックバイウェイ制度に対する期待
 (活動団体アンケート：複数回答)



活動団体の役割

活動団体の役割としては、それぞれの団体独自の活動を主たる役割と認識、ルート運営活動計画は「代表者会議」、PRは「国」や「地方公共団体」、「リソースセンター」の役割と認識している。

図表 2.36 シーニックバイウェイ制度における活動団体の役割
 (活動団体アンケート) (全メンバーN=118)

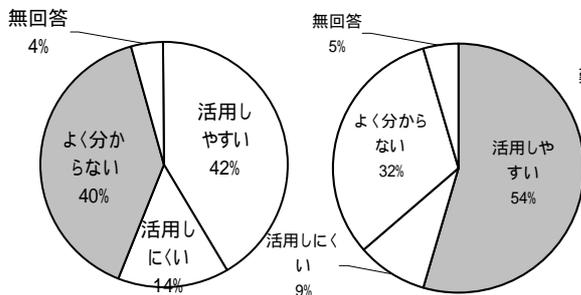


仕組みの活用や持続性について

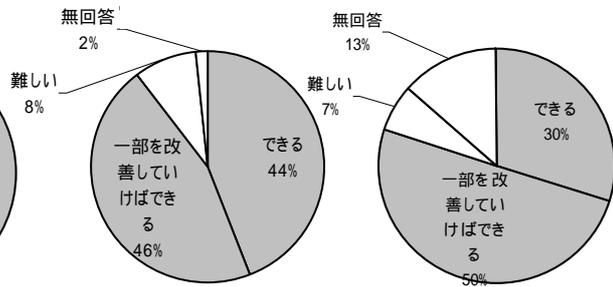
仕組みの活用のしやすさについては全体で42%が「活用しやすい」と回答し、中でも活動団体の代表者は半数以上の54%が「活用しやすい」と回答している。ただ、「よく分からない」も全体で40%に達しており、仕組みに関する広報を積極的に行っていく必要がある。

持続性については、「難しい」と答えた者は10%未満となっており、仕組みの持続性についてはある程度確認された。しかし、半数程度は改善が必要である答えており、今後は活動団体とのコミュニケーションを活発にしていくなどの対応が必要である。

図表 2.37 仕組みの活用のしやすさ
(全メンバーN=118) (代表者等 N=22)



図表 2.38 仕組みの持続性
(全メンバーN=118) (代表者等 N=22)



シーニックバイウェイ制度の改善点

全体の過半数の53%が「活動団体と行政が連携しやすい体制とする」と回答し、行政との連携を重視している。また「地域の人を巻き込む仕組みをつくる」が49%と続いており、より地域に密着した活動を希望している。

図表 2.39 シーニックバイウェイ制度の改善点
(活動団体アンケート：複数回答) (全メンバーN=118)

